

「継承」から「共生」へ

堺栄光教会 後藤 真



イエスは十二人を任命し、彼らを使徒と呼ばれた。それは、彼らをご自分のそばに置くため、また彼らを遣わして宣教をさせ……。

マルコ3・14

次世代に信仰を継承するためには何が必要でしょうか。それは先の世代と次の世代が共に生きることです。そこで「信仰継承」を「歩深めた「信仰共生」ということばを提案したいと思います。

「継承」「バトンタッチ」ということばには「受け渡す」というイメージがあります。けれども、わたくしたちが継承したいと願っている信仰は、モノのように受け渡せる知識や情報ではありません。イエス様に従って生きる生き方そのものです。

イエス様が十二弟子を選んだ第一の目的は「そばに置くため」でした。イエス様はその目的どおり、弟子たちと共に生きてくださいました。そして彼らの弱さを受けとめ、理解し、励ましました。

また、ご自身の生き方を通して、神への従順と他者に仕える謙遜の姿を見せてくださいました。イエス様は共に生きることによって弟子を作り、宣教へと遣わしたのです。

堺栄光教会では中高生たちの交わりを青年たちがリードしています。みことばや祈祷課題の分かち合い。たこやきパーティーや合格祝い、おしゃべりの楽しい時。気づけば夕暮れまで教会で過ごしている中高生たちのそばには、最後まで一緒に時間を過ごす青年たちの姿があります。彼らの「共に生きる」姿にいつも励まされ、教えられます。

その青年たちもまた、先の世代と共に生きること、成長してきました。一九九三年の教会総会資料に「青年の結婚、クリスチャンホームの形成、信仰継承のサイクルを作る」という宣教目標が掲げられています。このころの幼な子どもたちがいまの青年たちです。共生を重ね、継続することで、教会に次世代を育てるサイクル、文化が作られてきました。

共生は、目新しいことからではなく、教会共同体の本質です。教会が本来の教会らしくあることが次世代を育てます。新年度、原点に帰る気持ちで、次世代との「信仰の共生」をめざしてまいります。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
カリキュラム解説	4
教師養成講座「主に喜ばれる教会学校(前)」	5
復活	13
キリストの宣教	25
詩歌	49
牧羊ひろば(黒磯教会)	91
「牧羊者」の購読・利用について	96
おわりに	96

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
 こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」(以上、日本キリスト教
 団出版局)、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」(日本ホーリネス教団出
 版局)、イン：「教会学校さんびか」(インマヌエル教会学校部)、ふ：「ふくいん子
 どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」(以
 上、日本児童福音伝道協会)、PW：「ブレイズワールド」(リビングブレイズ)



●復活

4月4日 イースター
・進級式
主イエスの復活
マタイ28:1～10
同6節

11日
共におられる
との約束
マタイ28:16～20
同20節

●キリストの宣教

4月18日 イエスの受洗
ルカ3:15～22
同22節

25日 荒野の誘惑
ルカ4:1～13
同4節

行事 テーマ 聖書 暗唱聖句

●詩歌

5月2日 弟子への招き
ルカ5:1～11
同11節

9日 母の日
両親に仕える
イエス
ルカ2:41～52
同51節

5月16日 主は羊飼ひ
詩篇23:1～6
同1節

23日 ベネディクト
聖霊の実
ガラテヤ5:16～26
同22、23節

30日 み言葉は光
詩篇119:105～112
同105節

6月6日 主をおそれる
箴言1:7～19
同7節

13日 花の日・
子どもの日
キリストの香り
IIコリント2:12～17
同14節

20日 父の日
天の父への祈り
マタイ7:7～12
同11節

27日 ヨブ
ヨブ1:1～22
同21節

二〇二二年度 カリキュラム解説

今年度は、昨年度から始まった三か年カリキュラムの2年目になります。旧約聖書は3年かけて、原則として歴史順に学び、新約聖書は各年、いずれかの福音書を中心にイエス様の生涯を一通り学ぶことができます。その他、教会暦や行事に合わせたカリキュラムも盛り込んでいます。

①旧約聖書

旧約聖書からの学びは、モーセを指導者とする出エジプトの出来事、ヨシヤに率いられた約束の地獲得の出来事を中心に取り上げます。また、初夏には詩歌（詩篇、箴言、ヨブ記、伝道の書）を取り上げます。

②新約聖書

新約聖書は、ルカとヨハネの福音書を中心に「キリストの宣教」「キリストとは誰か」「キリストとの出会い」を学びます。また、1月には旧新約にまたがって、聖書を貫く「神の国」のテーマを扱います。

③教会暦・年間行事によるカリキュラム

昨年度末の単元「キリストの十字架への道」に続き、年度初めには「復活」の単元が置かれます。年末からは「クリスマス・年末」、年度末には「キリストの十字架への道」が置かれ、翌年度の受難週に続いていきます。

④テーマ「救い主と出会う」（ルカ19・10）

今年度のテーマは「救い主と出会う」です。旧約の出来事が救い主をひな形として指し示すものであることを知り、その成就として来られた救い主イエス・キリストと、一人一人が明確な出会いを体験できる一年となるようにと願っています。

なお、「カリキュラム」は教会教育室ホームページからダウンロードしていただけます。また、「ワーク（A）（C）」、「子ども聖書日課」、「中高科へのヒント」に加え、「み言葉カード（カラー、主要5訳対応）」、「フラッシュカード（白黒、カラー）」も無料でダウンロードできますので、ぜひご活用ください。

主に喜ばれる教会学校（前）

長島 幸雄

長島幸雄師（一九一三〜一九八六）はかつての教会学校局の初代局長で、『牧羊者』の名付親です。以下の講座は、『牧羊者』一九八七年4月号から9月号まで、6カ月 にわたって連載されました。現在でも傾聴に値する重要な内容です。今号と次号の2回にわたって掲載させていただきます。

さて、教会学校教師はどうあるべきか、教師の資格について述べますなら、

①救われている信徒であること―すなわち、罪を悔い改め、罪をゆるされ、神の子として生まれ変わった経験を持って人でなければなりません。救われていないと本当の意味において、子どもに伝えるメッセージがな

いからです。

②良い信者であること―それは、個人として、家庭においてもどこにおいても、祈りとみことばによって信仰生活している人であります。

③良い教会員であること―教会の会員となり、教会の責任を負い、教会生活をしている人であります。信者であると共に教会の重荷を負う教会員であることが必要なのです。

④良い教会生活をしていること―聖日礼拝を土台に、定められている教会生活を行い、教会奉仕を行うこと、そして、教会生活を土台として、家庭生活、社会生活を行ってゆくことは非常に大切なことであります。

さて、教会学校の教育という問題を取り上げましょう。

ここでは、来たりたもう主の前に立つ教会、そして信徒の教会形成という教会のプログラムにならって、進められていく教会学校のあり方について述べたいと思います。

教会の伝道の方法として、特別伝道集会を開き、多くの人々が教会に飛び込んでくるという伝道（私はこれを飛び込み伝道と名づけているのですが）によって、様々な人々が救われることを望む反面、本音では、教会に有力者が与えられることを願って伝道する場合もあります。しかし、それと同時に「育てていく」ということも大切なのです。教育者がほしければ、小さな子どもたちに伝道をして、その中から教育者のクリスチャンが生まれ出るように教育していく。こういう方法が教会学校の教育なのです。有力な政治家がほしいと思えば、政治家が生まれるように祈りながら幼い魂に触れていく。それが育つてやがて政治家として立派な者となって、しかもその教会の教会員である。このように、人物造りというとらえ方で教会学校に励んでいくなら、10年経ち、20年経ち、30年経ち、40年経つうちに実が結ばれていくのがあります。これからの教会は飛び込みで何かを得ていく

というようなものも、計算の中にあってもいいけれども、育てていくというとらえ方があってもいいのではないのでしょうか。自分が所属している教会は、人材不足ではないのです。20年後、30年後に光り輝く素材が、今、教会学校の中にあるのであると捉らえるなら、教会学校は非常に楽しみになってきます。

さて、教会学校の教育について具体的に上げるなら、次の四つのがいえると思います。

- ① 信仰の教育
- ② 祈りの教育
- ③ 聖書の教育
- ④ 救霊の教育

まず信仰を教育するということは、キリストを伝え、キリストを信じさせ、キリストの名を呼ばせることです（ローマ10・10、13〜17）。何かの時に主の名を呼ぶということ、実際問題に触れて教えていくということが大事です。例えば分級の時などに、「みんな家族の人は元気ですか」と、一人一人に尋ねる。そうすると応答があると思います。お母さんがお腹が痛いって寝ているとか。「それでは神様にお祈りしましょう。神様は助

けてくれるから」と言って、その子のお母さんのためにお祈りしてあげる。そうしてそのお母さんが治ったなら、「それでは感謝しましょう」と言ってお祈りしてあげるなど。そういうようなやりとりによって、神様により頼めば神様が助けて下さるということを、自然に子どもたちに知らせることができるとです。ですから、「イエス様を信じなさい」と言うだけではなく、信じる事柄を具体的な方法でもって子どもたちに教えていくことが大切なのです。

第二は、祈りの教育です。まず主の名によって祈ること(ヨハネ14・13)。「私の名によって願うことはなんでもかなえてあげよう」(口語訳、以下同様)。ですから、お祈りのあとなどに、「お祈りがなげきかれるか」といって、主の名によって祈るからです」と教えることができます。それと同時に、神の前に出ること(マタイ6・6〜8)。「あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においてになるあなたの父に祈りなさい。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう」。このように、祈りというのは、神様の前に出ることだと教えていくのです。それから、

祈りはみんな祈るといふこと(マタイ18・19〜20)。「もしあなたがたのうちのふたりが、どんな願い事についても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをかなえて下さるであろう。ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである。」ある時、一人の若い奥さんが、涙を流しながら「自分も教会の信徒になりたい」と願ひ出られました。わけを聞くと、その家の小学生と幼稚園になる二人の女の子が教会学校に来ているそうですが、ある時、夜中にものおとがして目を覚ますと、その子どもたちが床の上起きてお祈りしているといふのです。上のお姉さんが妹の名前を呼んで、「風邪がなかなか治らないから早く治して下さい」と言つて、妹の頭に手をおいて祈っている。やがて祈り終えると、妹も「お姉ちゃんの風邪をいやして下さい」と言つて頭に手をおき祈っているのです。その二人の祈り合っている姿をみて、お母さんが感動なさり、「こういうことを教会で教えているということ、すばらしい。自分も信仰に入りたいたい」といって、教会に来られたのです。

ですから、教会学校で教育する方法は、いろいろあり

ますけれども、イエス様を信じることを教育し、それから祈ることを教育して、それを実際の生活の中で表わしていけるように教育していくことが、実際教育として必要な要素になってきます。

それから、第三には、聖書の教育ということです。まず、聖書に親しませることが大切です(Ⅱテモテ3・15)。「幼い時から、聖書に親しみ」。聖書があっても全然開かないとかいうのではなく、まっすぐ聖書を開いて、聖書が異質なものでなく、子どもたちの手で開かれるように、聖書に親しませるように教育していくことです。聖書が、「教会に来た時しか開かない、むずかしい本」ではなく、親しみやすい、大切な神さまのことばであることを、子どもたちに体験させるのです。そのためには、教師自身も、聖書に親しんでいることがどうしても必要です。

次に大事なことは、聖書を読むだけでなく、神のみことばに生きるということです。聖書の中の一つのみことばが、命となって私たちのうちに働いて生きていく―これを私たちの信仰の立場では、「神様が私たちにみ声をかけて下さる」ととらえるのです。

神様の声を聞くということは、あらゆる宗教がやって

います。しかし、復活の主を信じる私たちクリスチャンは、聖書という書物を通じて神様の声を聞きます。また、それと共に、聖霊の働きによつて的確なみことばを私たちにあてはめて下さることを信じるのです。それは私たちにとつて、み声のある言葉となつて響いてきます。そこが他と違うところであります。

大事なことは、今、目の前にある問題について、「どうぞ神様、あなたの御心を、御声を聞かせて下さい。今、聖書を開いてその御声を聞こうとしています」と祈ることです。それから聖書を聞くのです。すると、必ず御声を伴ったみことばを聞くことができるのです。それから、もう一つのことばは、聖書を開かない時に与えられた言葉があるなら、一度、聖書を開いて確かめること。もし聖書にあれば、これは間違いなく神様の御声だと、確信をもつことができます。そういう作業が必要であり、大切なことであります。

このようなことは、口で説明してわかることではなく、子どもたちと接していく中で、絶えず繰り返し、繰り返して、子どもたちに身をもって知らせていくことが必要です。そうすることによって、自分で神様の声を聞く人

に造り変えられていくのであります。

さて、次は救霊の教育です。すなわち、子どもたちの魂の様子を見つつ、チャンス을握って罪を悔い改めることを教え、イエス様を信じ、信仰告白をすることによって救われることを知らせ、受洗によって教会員になっていくことを教えるのです。救霊の教育、これは教会学校の究極の目的であり大事な要素であります。

ある地方で、私がまだ神学生の頃、奉仕していた時、教会学校の子どもたちの中に、男の子も投げとばしてしまふ男勝りの、女番長のような子がいました。その子が、反抗すると、教会学校がムチャクチャになってしまふような子でしたが、ある集会が終わった時、その子が私に言いました。「私も救われたい」。「それなら、一緒に祈りしよう」と言って、一緒にお祈りをし始めました。すると、その子から、純粹で真剣な悔い改めがなされたのです。それはこういうことでした。昔のことで、わずかだけでも、道でお金を拾った。しかし、それを交番に届けなくて自分で使ってしまった。そのことを罪として悔い改め、その夜、イエス様を信じて喜びに満たされた。そして神様と人の前に、罪をおわびしよう、という

ことで交番へ行き、正直に告白して、代わりに持つてきたお金を差し出した。ところが、巡査も、「過ぎたことだし、あなたが届けてくれた、ということ」で、このお金は、教会の献金箱にでも入れて下さい」といって、ゆるしてくれた。それから、その女の子がガラッと変わって、良い教会学校の生徒になっていったのです。ですから、鮮やかな回心をした子どもというのは、狂いのないクリスチャンの生涯を送っていただけるのです。

次に、将来の教会の良き教会員、奉仕者となっていくには、信仰生活のしつけがなされなければなりません。このようなしつけというのは、忍耐強く、何度もしないかなくてはなりません。魅力ある教会をめざすために、まず第一、清潔であることです。掃除が行き届いており、整頓されており、簡素であることです。

第二に、礼節の美、あいさつをきちんとすることや、年長者を敬うこと、また、服装など、華美にならないおしゃれを心がけ、自分を喜ばせるためのおしゃれではなく、周囲の人々に好感を与えるおしゃれをするということとは大切です。

第三には、信仰の美。それは、①敬虔、②確信、③平

和です。死んでよみがえられたイエス様は生きておられ、私たちの心の内に臨在しておられるという敬虔な姿勢にならなければなりません。内住のキリスト、これこそ信仰の美ではないでしょうか。次に確信です。ものごとに対して、どうしたらよいか分らないという生き方ではなく、事が起きたなら、どんな時であつても神様の前に祈り込んで、はつきりとした解答をいただき、握っていく。そこには平和があるのです。これが信仰をもつ人の美しさだと思います。

私の教会でも「魅力ある教会」をめざすことをあげ、教会全体の人にもこのようにあつてほしいという願いから、スローガンにしておかれています。

さて、魅力ある教会学校について、これらのことを土台として、より具体的に生活のしつけについて学んでいきたいと思えます。

- ① 履物の整頓
 - ② あいさつ
 - ③ 後片付け
 - ④ 奉仕のしつけ
- まず、子どもたちの家での生活において、家族の人の

履物を整頓し、家族のひとりひとりにあいさつをし、自分の部屋や机の上は、きちんと片付けるようにと口すっぱく言いながら、教会学校の子ども教育の中に入れて指導していくと、だいぶ子どもたちも気がつくと思います。そして、少しでも神様のお役に立つように奉仕のしつけをしていくこと。ある教会では、ひとつの方法として中学生が司会をしたり、出席の人数をメモにとったり、工夫しておられるようです。自発的に奉仕ができるよう指導していくことが大切です。

さて、次に、信仰のしつけです。

- ① 祈りのしつけ
- ② 聖書を読む時
- ③ みことばを聞く時
- ④ 聖日の礼拝
- ⑤ 献金

まず、祈りについて。具体的に言うなら、だれの目にもわかるように、目をつむり手を合わせ、イエス様の御名によって祈ること。他の人が祈っている時は静かにし、共に心を合わせるなどです。

また、聖書を読む時は、神の靈感によって書かれた書

物を読むのですから、寝たまま読んだりせず、姿勢を正して読むこと。また、ある方は、「聖書の上に讃美歌を置いたり、ものを置いたりするだけで心が痛む。それで、聖書の上には何もおかないようにしている」という人もおられました。神の書物である聖書に対して、そういった心がけというのは非常に大切なことだと思えます。

私が信仰にはいつて間もない頃、先輩の先生に言われました。「聖書は神の言葉で、御霊の剣である。聖書を忘れる者は、侍が2本さしの刀を忘れるのと同じで、それこそ侍の恥だ。だから、どんなことがあっても、絶えず聖書を身から離さないことだ」と。

聖書に対する態度も、教師自身、自分をしつけると共に、子どもたちにもしつけていくことが大切です。ですから、聖書を読む時にきちんと腰を下ろし、正座の姿勢で聖書を聞くなど、日ごろの自らの姿勢を点検してみることも必要です。

第三に、みことばを聞く時の姿勢を正させること。礼拝や分級の中で、全員の子どもが長い時間というわけにはいきませんが、司会者が聖書朗読する時ぐらいは、きちんと姿勢を正して聖書に目を向け、聞くようにと、み

ことばに向かう態度を教会の中で教えていく必要があります。同時に、みことばを覚えさせること(章、節まで)。記憶力の良い年代の子どもたちに、しっかりと覚えさせておくと、将来、試験にあった時や様々な時に、かつて幼い頃覚えたそのみことばが支えとなり、力となっていくのであります。

第四に、聖日を守ること。家族全員が、「日曜日にピクニックに行こう」と言っている時、「聖日だから教会に行くの!」と、家族の前で恐れず証しをするような子どもたちが生まれてくるように祈りたいものです。

第五に、献金であります。言にくいことのひとつですが、大切なことです。ひとつの方法として、献金袋をもって歩くのは、先生がするより、子どもが袋をもって集めてまわり、あとで子ども自身がお祈りする方が、自分たちが神様にささげものをした、という意識がつくようです。

また什一献金について、その意味を理解させるために、ある先生は、次のような説明をされたそうです。まず、もらってきたばかりの月給袋のお金を、十に割って並べる。そして、一は神様のもの。あとの九は自分たちで使

うもの、と教えた。すると子どもは、

「神様の方が少ないなあ。おれたちが使うものの方が多すぎる」

と言ったそうです。そのように具体的な例で、十分の一は神様に当然ささげるべきものであると子どもたちに教えることによって、彼らがやがて社会人となった時に、経済的な祝福を受けていく鍵にもなるのです。そしてまた、信仰というものを、生活のど真ん中で受け止め、表され、消化されていくように教えることによって、信仰そのものが子どもの身についていくのです。

(次号、後編に続く。)

(※「牧羊者・二〇〇三年度Ⅰ〜Ⅱ巻」に掲載されたものを、一部再編集して掲載しました。)

聖書

マタイ28・1～10

タイトル

永遠の希望と喜び

暗唱聖句

ここにはおられません。前から言っておられたとおり、よみがえられたのです。

マタイ28・6

目標

復活のキリストによつて失望や恐れを喜びに変えていただく。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、葬式に参列したことありますか？ もしかしたら、おじいちゃんやおばあちゃん、親しくしていた人を亡くした経験がある人がいるかもしれません。それは本当に辛くて悲しいことだったでしょう。

今日の箇所にも、悲しみの中に落とされた人たちが出てきます。でも、その深い悲しみが永遠の喜びに変えられたのです。

十字架にかかられたイエス様

先週は受難週でイエス様が私たちの罪のために十字架にかかり死んでくださったことを深く心に留めるときでした。イエス様は、罪に苦しめられている私たちを自由

に、そして幸せにするために、十字架から逃げることをしないで進んで行かれたのです。

イエス様は、苦しくて残酷な十字架にかかる前にも、顔を背けたくなるような辛い体験をされました。それは、親しい者から裏切られ、多くの人たちからバカにされ、鞭打たれ、徹底的に侮辱されたのです。そして最後は、手足に釘を打たれ、頭には茨の冠をかぶせられ十字架に付けられました。イエス様はその十字架の上で血を流しながら死ぬまで苦しまれたのです。

神様であり、何も罪を犯したことはないイエス様が、どうしてこれほどまでに苦しまなければならなかったのでしょうか。それは、私たちの罪がそれほど恐ろしいもので私たちを苦しめるものだからです。イエス様は、その罪のすべてを負われ苦しまれたのです。

皆さんは、罪がどんなに恐ろしいものであるかを知っていますか？ 罪を簡単に見ないでください。罪を心の中に残さないでください。罪はあなたを不幸にします。イエス様の十字架だけが、私たちを罪から解放します。

墓に葬られたイエス様

イエス様の弟子たちは、イエス様を裏切つて逃げて行

きました。でも、大勢の婦人たちはイエス様の最後を見届けたのです。婦人たちは、今までずっとイエス様を慕い従っていました。そのイエス様が目の前で苦しみながら死んで行く姿を見て、どのような思いだったでしょうか。彼女たちは悲しみのどん底に突き落とされてしまいました。

ヨセフという人が、イエス様の遺体を引き取り亜麻布で包み、墓に納めました。当時の墓は、岩を掘って作った穴で、入り口には大きな石を転がしてふたをしています。ヨセフがイエス様の遺体を墓に納めた後、一緒にいたマグダラのマリアともう一人のマリアは、墓に残りそこに座ったのです。彼女たちは、悲しみでいっぱいであつたに違いありません。また、イエス様を生き甲斐としていた彼女たちは、生きる希望を失ってしまったでしょう。涙がかれるほど墓の前で泣いたでしょう。

もし、私たちも死んで墓に納められて終わりなら、そこには悲しみと失望しかありませんね。

よみがえられたイエス様

イエス様を信じる人にとって「死」は、悲しみと失望で終わりません。それは、よみがえりがあるからです。

イエス様が死んでから3日目に、マグダラのマリアたちは、イエス様の墓に行きました。すると、大きな地震があり、御使いが現れました。そして婦人たちに「あなたがたは、恐れることはありません。イエスはよみがえられたのです」と告げました。今まで悲しみと失望の中にいた婦人たちでしたが、イエス様がよみがえられたことを聞いて、とても喜んだのです。そして、それを弟子たちに伝えに行く途中、よみがえられたイエス様に出会うことができました。イエス様に出会った彼女たちの喜びを皆さんが表現するなら、どんな表情でどんな声でその喜びを表しますか？ そしてその喜びを誰に伝えるでしょうか？

まとめ

このよみがえられたイエス様を心から信じている人は、苦しく悲しいことがあつたとしても、イエス様のよみがえりの中にある希望と喜びをもって生活することができます。この希望と喜びは永遠に続く恵みなのです。よみがえりのイエス様は、この喜びを与えてくださいます。皆さんはもうこの恵みを知っていますか？

♪すくいの主イエスに♪ (ホ95、イン37)

聖書 マタイ28・1～10 テーマ 主イエスの復活

序論

(小泉 創)

春は、新しいことが始まる期待と不安が入り交じる季節です。昨年は新型コロナウイルスの影響で学校も休みになり、教会に集まることも制限されました。これからどうなるかわからず、とても心配でした。私達は大きな出来事が起こると、まるで自分たちが狭いところに閉じ込められて、どちらにも逃げ場がないかのように感じてしまうことがあります。特にいのちがおびやかされる場面に立たされた時、人の弱さをひしひしと感じます。

一、悲しみと恐れの中で

イエスが十字架で死なれ、墓に葬られてから三日目の朝、墓を見に来たのはマグダラのマリアとほかのマリアでした。この女たちの足取りは重かったのです。希望の象徴であったイエスは彼女たちの目の前で、死なれて墓に葬られました。すべての希望であったイエスを失ってどうしたらよいでしょうか。女たちにできることといえ

ば、せめてイエスのからだに油をぬってさしあげること、そして時間をかけてその死を受け入れていくことしかなかったのです。イエスが語っておられた復活の約束を、女たちが心にとめている様子は描かれていません。死の前にして、何も期待できず、すべてのものはむなしく見えるばかりです。そして悲しみと恐れに囲まれているのです。私たちは今どのような思いを抱いているでしょうか。神は私たちにどのように触れてくださるでしょうか。

二、ここにはおられない

静かな朝、墓についた彼女たちの目の前で、想像も出ないことが起きました。大きな地震があり、主の使いが登場し、生きているものと死んでいるものとを隔てている墓の石が転がされたのでした。

屈強な番兵たちでさえ、恐ろしさを感じ震え上がり、死人を守っていたつもりが、逆に死人のようになりました。そして御使いは恐れおののく番兵を尻目に、女たちに向かって「あなたがたは、恐れることはありません」と告げました。十字架につけられたイエスを捜しているのはわかっていますが、主がおられるのはここではない

のです、と。

三日前にイエスがそこに葬られ、番兵が守り、石が入り口をふさいでいた墓の中に、すでにイエスのからだはありませんでした。すべてのものの終着点であるはずの墓は、空でした。

女たちは、墓の前に自分たちもこの死の中にとじこめられていると思っていたことでしょう。そのように、私達も罪と死が支配するやみの中にとどまってはいいのでしょうか。墓の石はころがされているのに、光の差すところが見えているのに、顔を伏せたままではいいのでしょうか。御使いの声は、私達にも語られています。いのちの主は、絶望の中、死の中に閉じ込められています。い。あなたがたも墓の中をのぞき続けるのをやめなさい。

三、復活のキリストによる喜び

女たちは恐ろしくはありましたが、同時に大いに喜びました。すべてのことを理解できたわけではなかったのですが、目の前で起きていることと、御使いの言葉は彼女たちに新しい希望を与えてくれました。

仲間の弟子たちにこのニュースを届けようと走り出した女たちの前に、よみがえられたイエスが現れて下さいました。み使いの言葉どおりでした。愛する主の「おはよう」という声は、新しい朝が始まったことを告げる言葉でした。死は打ち破られました。やみが支配する夜はおわりました。十字架で死なないことよりも、もっと素晴らしいことが、神によってなされました。自分達が思っていた以上に神の力は強く、イエスはすべてのことに勝利してくださいました。永遠のいのちにつながる新しい一日が始まったのです。

結論

私たちの前にも、現実の大きな問題があります。しかし、死にすら勝利してくださった主は、私たちと共にいてくださいます。よみがえりの主は、私達が閉じ込められている失望、恐れの中から、私達を連れ出して下さいます。この春、私達がおかれている場所がどのようなものであったとしても、よみがえりの主、勝利の主が、共にいて下さり、素晴らしいわざをすすめてくださることに期待いたしましょう。

研究資料

(中島啓一)

福音書記者たちは、復活の場面を直接には描いていない。最初の証言は、空の墓からという証拠を伴った、天的な存在(「マタイでは「主の使い」)による報告である。もちろん墓が空でなければ、教会がイエスの復活を信仰の中心に据えることは不可能であった。しかし空の墓は逆の立場の論拠にもなり得る(28・13)。それ単独では、信仰のきっかけとはなっても、復活の確固たる証拠にはなり得ない。復活のイエスと会った者の目撃証言が不可欠なのである。その最初の証人となったのが女性たちであった。この聖書の女性観は、その時代の女性観を全く覆すものであったと言える。現代と比べて女性の証言が著しく軽んじられていた時代背景の中で、もし福音書が人の手による創作であったならば、この重要な役割は、決して女性には託されなかったであろう。逆説的であるが、このこともまた、主の復活と、それにまつわる聖書の記述の信頼性を力強く証しするものであると言える。

テキスト

1 安息日が終わって 安息日は土曜日の日没をもって

終わるが、安全と視界確保のために、週の初めの日の明け方 まで待たねばならなかった。マグダラのマリヤ全福音書が復活の最初の証人として挙げている。もう一人のマリア 「ヤコブとヨセフ」(27・56、マルコ15・40では「小ヤコブとヨセ」)の母であろう。「クロパの妻マリア」(ヨハネ19・25)と同一かも知れない。墓を見に行つた 亡骸なきがらに香料を塗るため(マルコ16・1)。

2 主の使いが石をわきに転がし 女性たちが墓に入るためであつて、イエスが墓から出るためではない。その上に座つた 死の象徴である墓石の上に座ることは、死に対する勝利をあらわしている。

4 番兵たち 祭司長たちの意向を受けて墓の番をしていた(27・62〜66)。その恐ろしさに震え上がり、死人のようになつた 大きな地震に加えて、光り輝く御使いの姿は、彼らを恐れさせるに十分であつた。体が硬直し、気絶したのであろう。死人の番をしていた彼らが死人のようになり、彼らが守っていた死人が死からよみがえつたことは、極めて皮肉なことであつた。

5〜6 恐れることはありません 直訳すると「(彼らのように)あなたがたまで恐れてはならない」。十字架

につけられたイエス：…ここにはおられません。死者の中にイエスを見出そうとするならば、彼らのようになる。捜す場所はここではない。前から言っておられたとおりイエス自身が復活を予告していた（16・21、17・23等）。**よみがえられたのです**。直訳は「よみがえらされた」（受動態）。動作主は、言うまでもなく神。イエスの復活は父なる神のみわざである。納められていた場所を見なさい。御使いは女性たちに、イエスの体がそこにあることを確認させる。しかし復活への信仰は、空の墓という事実だけから起こるものではない。そのため、後にイエスがご自身を現してくださいるのである。

7 弟子たちに伝えなさい 女性たちは御使いから、弟子たちへのメッセージを託された。イエスは死人の中から**よみがえられました**。「神によって」よみがえられた」（6節と同じ）。これこそが教会の信仰告白の礎石である。あなたがたより先にガリラヤに行かれます…（26・32参照）。イエスもすぐ後で同じことを語られる（10）。**私は確かにあなたがたに伝えました**。以上の言葉が、神からの権威ある啓示であることを強調している。

8 恐ろしくはあったが大いに喜んで 女性たちはなお

恐れつつも「この上ない喜び」（2・10と同じ）で満たされた。急いで墓から立ち去り、女性たちは、「急いで行つて」（7）という命令に、その通りに応答した。

9 イエスが：彼女たちの前に現れた 女性たちへの復活のイエスの顕現はこの福音書のクライマックスの一つである。彼女たちは、復活の主を最初に目撃するという特権にも与つたのである。その足を抱き、イエスを押し、イエスが復活されたという事実だけでなく、復活がイエスの言葉と活動とを立証するものであるゆえ、女性たちはイエスを礼拝せずにはいられなかったのである。

10 イエスは言われた：…御使いと同じメッセージを、 イエスご自身も女性たちに託した。**兄弟たちに** イエスはたびたび弟子たちを兄弟と呼ばれた（12・50、25・40、ヨハネ20・17等）。見落としてはならないのは、弟子たちがイエスを見捨てて逃げた後にもかかわらず、彼らを「兄弟たち」と呼び続けておられることである。ここにも神の大いなる愛と赦しが表されている。

参考文献 注解書 D. H. Hagner (Word), D. Hill (New Century Bible), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

マタイ28・16〜20

タイトル

一緒にいてくださるイエス様

暗唱聖句

見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。

マタイ28・20

目標

共にいてくださるとの約束を信じ、主を証しする者となる。

導入

(飯田勝彦)

新しい学年になり、少し慣れましたか？ クラス替えのあったお友だちは、新しいお友だちが出来たでしょうか。もし、みんなの友だちが「これからずっとずっと、友だちでいようね」と言ってくれたら嬉しいでしょう。イエス様から同じ言葉を言われたらどうでしょう？ イエス様は心からみんなに「どんな時でも、あなたから離れずにいつも一緒にいるよ」と約束してくださいませ。

イエス様の復活を信じる

イエス様は、どうして「いつもでも一緒にいる」と言うてくださるのでしょうか？ それは、みんなを心から愛していてくださるからです。みんなも大好きな友だちと

いつまでも一緒にいたい、と思うでしょう。イエス様も同じです。イエス様は、罪で苦しんでいる私たちを自由にするために十字架で死なれました。しかし、イースター礼拝で聞いたように、イエス様は死んで終わったのではなく、3日目に死の力に打ち勝ってよみがえられました。そして、弟子たちの前に自分がよみがえったことを現してくださいました。でも、弟子たちの中には、よみがえりを信じる人と疑う人がいました。みんなはイエス様のよみがえりを心から信じていますか？ 「ピミヨ（微妙）」って言う人がいますか。イエス様のよみがえりを信じるなら、私たちの心に力と大きな喜びがわき出てきます。

イエス様を伝える

よみがえられたイエス様が、弟子たちに「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい」と言われました。これは、イエス様の「大宣教命令」と言われるものです。イエス様は、このすばらしい福音をすべての人に伝えなさいと弟子た

ちに命令されたのです。

みんなは、嬉しいことや楽しいことがあったら友だちやお父さんお母さん、兄弟姉妹に黙っていられなくて思わず言ってしまうと思います。そのように、よみがえられたイエス様を多くの人たちに伝えて行きましょう。

イエス様が弟子たちに言われたこの「大宣教命令」は、今の私たちにも言われていることです。そして、イエス様はみんながイエス様の事を一人でも多く人たちに伝えて行くことを期待して今も用いてくださっています。

イエス様は共におられる

弟子たちには、イエス様を伝えに行くために何が助けになったでしょうか。それは、「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」と言うイエス様の約束でした。イエス様は弟子たちだけに宣教に行かせて「わたしは知りません。あとは頼みます」と言われませんでした。

イエス様は、弟子たちと共に行ってくださるのです。それも、世の終わりまでいつも共にいてくださるのです。イエス様が十字架で死なれた時、弟子たちはイエス様を見捨てて逃げてしまいましたし、彼らは心の中で「もう

すべてが終わりだ」と思ったに違いありません。でも、イエス様は、裏切った弟子たちを見捨てないで彼らの前に現れてくださいました。そして「世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」と約束されました。

イエス様が弟子たちに言われたこの言葉を今朝、同じようにみんなにも言われます。たとえイエス様のことを思う時にも思わない時でも、どんな場所でもイエス様は、いつも共にいてくださいます。そして私たちを、イエス様を伝える宣教のために用いてくださいます。イエス様の側で、イエス様のお役に立てるなんて素晴らしいですね。

まとめ

イエス様が死よりよみがえり、世の終わりまでいつも共にいてくださると信じる時、みんなの心は守られ力が与えられます。そして、私たちは喜んでイエス様を伝えることが出来ます。今も共におられるイエス様を信じて、家族や友だちの所にイエス様の素晴らしさをイエス様と一緒に伝えていきましょう。

♪主はよろこびです♪ (ホ76)

聖書 マタイ28・16〜20 テーマ 共におられるとの約束

序論

(大頭真一)

復活されたイエスは、天に昇られる前、弟子たちにお言葉を残していかれた。それは、イエスを信じる私たちにも与えられているお言葉である。

一、信仰への招き

復活のイエスを「疑う者たちもいた」。しかし、イエスは疑う者も含めて彼らに「近づいて来て」くださったことに目をとめたい。私たちは信仰の弱さを覚えるとき、主を遠く感じる。けれども、そのときこそ主は最も近づいていてくださるのだ。復活の主を疑った代表格はトマス。主はトマスに近づいて、「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」(ヨハネ20・27)とおっしゃってくださいましたことを思い出そう。

二、宣教のご命令

「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。」主イエスは「ですから」と宣教を命令される。その権威は神の子としての権威であるだけでなく、十字架と復活を通られたことによって父から与えられた二重の権威である。この権威が及ばないところはどこにもない。私たちの宣教は主の権威の及ばないところで行われるのではない。それがたとえ地の果てであつても、また日本のような偶像の国であつても、主の権威の下にある場所であることを覚えたい。

大宣教命令の内容である「弟子とし」、〈父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け〉、〈命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい〉はいずれも、宣教の目的が一回かぎりの決心ではなく、生涯を通してよいよ神との交わりに進むキリスト者を誕生させることにあることを示す。特に〈父、子、聖霊の名〉というところの名は単数であり、神の三位一体性を示している(新改訳チェーン式引照付欄外註参照)。三位一体の神は、愛の交わりのうちに一つの神である。そのありさまは〔ペリコレーシス、すなわち相互内在・相互浸透と表現さ

れてきた(マクグラス「キリスト教神学入門」445頁)。バプテスマによってキリスト者は、ご自身が交わりの神である三位の神との交わりへと招かれる。そして、その交わりのうちにキリスト者は宣教に遣わされるのである。このことをヨハネ17章は余すところなく描く。「父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです」(21)とあるように。

三、臨在の約束

昇天後も、主イエスは(いつもあなたがたとともにいます)と約束された。遍在(へんざい)にでも存在すること)は神の性質である。インマヌエルの神である主が私たちとともにいてくださるのだ。

けれども、ここでの臨在の約束は、信仰者ひとり一人に与えられている約束であると同時に、特に宣教する教会に向けられている約束であることに注意したい。キリストは「そのからだである教会のかしらです」(コロサイ

1・18)。主は教会と一体でいてくださる。教会の喜びや苦しみは、主の喜びや苦しみである。かつて「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」(使徒9・4)とおっしゃった主は今も教会と喜びや苦しみをともにしていてくださる。現実の教会がいかに問題だらけであるかは言うを待たない。教会の歴史がそれを語っている。何よりも私たち自身はなほだ不完全で恥じ入るようなお互いである。けれども、そんな教会と共に宣教することを、主はお選びくださった。そして時に教会が誤り、私たちがつまずきとなるときにも、主は私たちと共にとどまってくださって、私たちを励まし、懲らし、悔い改めに導いてくださる。そして、何度でももう一度立ち上がらせてくださるのである。

結論

宣教は主の命令である。主はこの光栄あるわざをご自身の権威をもって可能とし、ご自身が共にいてくださることによって続行させてくださる。インマヌエルの主の招きに応じて、日々主を証しし続ける者であらう。

研究資料

(宮澤清志)

マタイの隠された主題のひとつはこの「共におられる主」(インマヌエル)ということである。マタイはこの主題によって福音書を書き出し(1・23)、この主題によって福音書を閉じる。同時にこの主題はマタイの中間にもみられる(18・20)。マタイのイエス像の一つは、この「共におられる主」であるということができるのである。

テキスト

16 十一人の弟子たち ユダの死を計算に入れた数字(27・5)。ガリラヤ 復活の主イエスがガリラヤで弟子たちにお会いになった記事は、この箇所とヨハネ21章に述べられている。イエスが指示された山 具体的な「山」の記述は出てこない。しかし、マタイにおいては、山は神的顕現けんげんの象徴として、また日常の世界から離れた啓示の場、ないしは救いの場として描かれている(4・8、5・1、15・29、17・1)。

17 疑う者たちもいた この言葉は注目に値する。実は、この「疑う者たち」が誰だれなのかで、この箇所の語り方も変わってくる。例えば16節の「十一人の弟子たちは」

を主語として、この場面には復活の主と十一人の弟子がいたとすると、疑ったのは礼拝している十一人の弟子たちということになる。しかし、「疑う者たち」(新改訳2017)と取った場合、この場所には十一人の弟子たちの他にも人々がいたことも推測され、パウロが「五百人以上の兄弟たちに同時に現れた」(1コリント15・6)という場面をここに見ることもできる。同時に「疑った」人々とは、この「兄弟たち」ということも可能性を残す。いずれにしても、復活者の顕現によって、信仰に導かれる者となお疑う者とは分極化したという見方である。また、マタイが「疑った」という言葉を用いるに際して、「礼拝」と結びつけている(この箇所と14・31)ことから考えると、礼拝しつつも疑ってしまう弱い人間性を指摘しているとも言える。

18 権威 イエスへの権威の与え主は父なる神である。イエスは荒野の試みにおいて、サタンからの試みを決然と拒否し、「下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい」と書いてある。」(4・8〜10)と、ただ神にのみ仕える道を進んで行かれた。ここにおいて、イエスは十字架への道を決然と進んで行

かれたのである。しかし、この十字架と、それに続く復活を通してこそ、天上・天下一切の権威がその手に託されたのである。

19〜20 イエスは、この「神の子」としての権威により、大宣教命令を出されるのである。その命令は「行って、あらゆる国の人々を弟子とする」ことである。この個所で、**あらゆる国の人々** とあるが、特筆すべきはマタイがイエスの復活において世界的伝道の視点を持ったと言うことである。復活前のイエスの時代には、福音はイスラエルに限定して語られていた(参考 10・5〜6、15・24)が、イスラエルが福音を拒否した結果、福音は異邦人に対しても語られる時代に突入した。イエスの復活によって新しい時代の幕が開いたと言える。

また、その弟子たちに命じられることは、「父と子と聖霊との名によって、人々にバプテスマを施すこと」であり、また「命じられたいっさいのことを守るように教えること」であった。前者について言えば、三位一体の神との結合という意味合いがそこにはある。**名において**とは、名の中へ、すなわち父、子、聖霊の神ご自身との生きた交わりに入ることを表わす。また、**後者の教える**

とは、教え続けるという継続を表す言葉であり、またその内容は、**命じておいた、すべてのこと** とあるように、山上の垂訓を初めとするこの福音書に記されているイエスの教えのすべてであると考えられる。**見よ。わたしは世の終りまで、いつもあなたがたとともにいます。** マタイによる福音書の特徴は、イエスを常に信者と共にいるお方(インマヌエル)として描いているということである(1・23、18・20)。マタイによる福音書のイエスは、**徹頭徹尾「インマヌエル」**で貫かれているといってもよい。洗礼を受けて、主イエスの教えの一切を守ることができるのは、主イエスが信者と共にいてくださるからである。

最後に、この箇所「すべての」「いつも」という句が繰り返されていることも見逃すことができない。福音はすべての人間に、聖書におけるすべての内容を、すべての時に、主の弟子たちによって、伝えられなければならないのである。

参考図書 デイヴィッド・ボッシュ『宣教のパラダイム 転換上』(東京ミッシヨン研究所)、他

聖書

ルカ3・15〜22

タイトル

愛と喜びのうちを歩もう！

暗唱聖句

あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。
ルカ3・22

目標

神が遣わされた御子イエス・キリストを信じて従う。

導入

(飯田勝彦)

4月は新しいスタートの時期です。新しい学年がスタートしました。なかにはクラス替えがあって新しい友だちと新学期をスタートした人もいますでしょう。

新しい学年になる前に何か準備をしましたか？ 一年生なら新しい制服やランドセルなどがありますね。他の学年なら新しい教科書、ペンケースや他の物を新しくした人もいるかも知れません。新しいスタートにはいろいろな準備が必要です。神様は、私たちが新しくされるためにいろいろな準備をしてくださったのです。

道を備えたバプテスマのヨハネ

聖書の中にヨハネという人が出てきます。今朝、登場するヨハネは「バプテスマのヨハネ」と言って、ちょっと

と変わった恰好をしていました。少し想像してみてください。彼はラクダの毛の服を着て、腰に革のベルトをしています。そして彼の食事はいなごと野蜜でした。さらに彼は、人気がない寂しい荒野に住んでいました。

このヨハネは、神様から大切な使命が与えられていました。それは、救い主イエス様が来られるための準備をすることでした。ヨハネは「あなたがたが待ち望んでいる救い主は私よりも力があり、私よりも遙に偉大な方です。そして、私たちを内側からきよめる聖霊と火のバプテスマを与えることがお出来ることになる方です」とみんなに、救い主がまもなく来られることを告げました。それがイエス様が来られる備えでした。

皆さんの中には、もうイエス様を信じて救われている人もいますでしょう。そのために神様がどんなことを準備してくださっていたと思いますか？ その一つは、教会の皆さんがあなたのために祈っていてくださったということです。

洗礼を受けたイエス・キリスト

ヨハネが悔い改めのバプテスマを授けているところに、イエス様もバプテスマを受けに來られました。この

ことはマタイに詳しく記されています。ヨハネはバプテスマを受けようとされるイエス様に「いやいやイエス様、私こそあなたからバプテスマを受けて頂かなければならない者ですのに、私のところにおいでになったのですか？」と慌てふためいている様子が目に浮かびます。もし、教会学校の先生が皆さんの所に来て「○○君、お願いがあるんだけど。私の頭に手をおいて祈ってくれない」と言われたら「えっ、そんなこと出来ませんよ。僕の方が祈って欲しいですよ」と言うかもしれませんね。

イエス様は罪のない聖なる方です。ですから、悔い改めのバプテスマは受ける必要がありません。でも、あえてイエス様は、バプテスマを受けるといふ正しいことを自分から進んでしてくださいましたのです。イエス様は徹底的に神様の望まれることをされました。

ヨハネからバプテスマを受けられた時に、イエス様が祈っておられると天が開け聖霊が降りました。そして天から「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」と父なる神様の語り掛けがありました。イエス様は神様から受け入れられ、愛されていることを確認されました。これはイエス様の働きの大きな力となったのです。

愛と喜びのうちに歩む私たち

イエス様は私たちの心、生活、人生を祝福でいっぱいにするために来て下さいました。そのためにイエス様は、祝福を妨げる罪を解決しようと十字架にかかって死なれ三日目によみがえってくださったのです。このイエス様を救い主として信じましょう。イエス様を信じるなら私たちはイエス様の内に招かれ、イエス様が父なる神様から言われた「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」という声をいつも聞きながら生活できます。

まとめ

父なる神様はイエス様にあつて私たちを見てくださり「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」と声を掛けて励まし続けてくださいます。この言葉は何と安心で力の湧く響きでしょうか。イエス様を信じ愛と喜びのうちに歩みましょう。

♪すくいの主イエスに♪ (ホ95、イン37)

聖書 ルカ3・15〜22 テーマ イエスの受洗

序論

(小泉 創)

洗礼式は喜びの日です。罪と死の内にとらえられていた者が救い出されて、父・御子・御霊の名によるバプテスマを受け、神のご支配の中で歩んで行く者とされるのです。

ところが罪なき神の子である主イエスも、公生涯のはじめに私たちと同じように洗礼をお受けになられたのです。

一、救い主は誰か

人々がずっと待ち望んでいたキリストは、預言者の權威に満ちた存在でした。多くの人は、バプテスマのヨハネが悔い改めを迫る姿に、不正を正し社会をつくり変える神のみわざを期待しました。ヨハネの姿は、自分たちが求める救い主にふさわしいと感じていました。

しかしヨハネは、自分は救い主ではない、と知っていました。①自分はその方の偉大さの前で仕える資格もな

いほど、いやしい者にすぎない、②その方は聖霊と火によるバプテスマを与え、③麦ともみ殻を吹き分けるように裁きを行われる、のだと。

ヨハネは救い主の道備えをするために来たのです。彼はヘロデの罪を告発し、とらわれの身となりましたが、それはキリストのたどられる苦難の道を取引したかのようにもあります。

ヨハネにはるかに勝るイエスは、ヨハネほど注目されることなく、人々の只中に立たれ、救い主として公生涯を始めようとしておられます。人々がどのように判断しようと、イエスこそが神が送られた唯一の救い主なのです。

二、イエスが受けられたバプテスマ

ヨハネが民衆に授けていたのは、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマでした(ルカ3・3)。イエスは罪の悔い改めを必要としないきよい方です。ですから本来は、バプテスマを受ける必要はなかったのです。それなのに、イエスは民衆と同じように、バプテスマを受けられました。イエスは神であるにも関わらず、罪人と同じと

ころにまで下りてきてくださったということですよ。

イエスがバプテスマを大切になさったので、教会も二千年間バプテスマを重んじてきました。主イエスが受けられたのと同じように、私たちもバプテスマにあずからせていただきます。それは私たちがキリストの死とよみがえりにあずかり、キリストと一つにされるためなのです。

三、神の愛する子

バプテスマを受け祈っておられたイエスに、不思議なしるしが与えられました。天が開けて聖霊が鳩のような姿をとってイエスの上に降り、天からの声がしたので。それはイエスに対する父なる神の宣言でした。

「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」。これは王の即位を歌った詩篇2・7を思い起こさせます。神は、神の子であり、王であるイエスを救い主としてお送りくださったのです。

これほどまでに尊い方が、私たちのすべてを引き受けてください、罪と死から救うために、いのちをかけてくださったのです。イエスの姿を通して、私たちは神を知

り、神の愛の大きさを知ることができます。

「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」(ヨハネ1・18)。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ3・16)。

結論

イエスは神であられたのに、私たちと同じ人の姿をとってくださった救い主です。どのように力ある人物でも仕える資格をもたないほどに貴いお方です。そうであるにも関わらず、イエスは私たちを愛し、共に歩むことを喜んでくださいます。イエスが父なる神にどこまでも従い通され、一つであられたように、私たちもイエスを信じて一つとされ、どこまでも従ってまいりましょう。

研究資料

(辻林和己)

この章の前半(1〜20)は、バプテスマのヨハネの言動と投獄が語られている。今回の箇所は、ヨハネが、自分のあとから来られる救い主がどのようなお方を語る言葉と、その後、主イエスがヨハネから洗礼を受けられる場面(21〜22)が記されている。

テキスト

15 キリスト 原語は[ギ]クリストース。和訳聖書ではそれぞれ「救主」(口語訳)、「救い主」(新改訳)、「メシア」(新共同訳、協会共同訳)と訳されている。[ギ]クリストースは[ヘ]メシアのギリシヤ語形。ヨハネはキリストではないか、と民衆から思われるほど偉大な人物であり、その影響は、後代まで、広範囲に及んでいた(使徒18・25、19・3参照)。

16 バプテスマ ヨハネが授けていた水によるバプテスマは、悔い改めた者の全身をヨルダン川に浸ける行為(浸礼)であった。私よりも力のある方 救い主のこと。履き物のひもを解く 当時、奴隷が主人に対する奉仕の中でも最も卑しいこととされていた。ヨハネは、救い主に

対して自分はそうする資格もないほどにそのお方は偉大であることを皆に伝えようとしている。聖霊と火 キリストは信じる者に聖霊を与え、聖霊で満たしてくださる。

火は、聖霊のきよめの働きを示す言葉。ヨハネのこの言葉は、後のペンテコステの日に実現した(使徒2・1〜4)。

17 箕 穀物を吹き分ける道具。穀粒を残し、殻を除くために用いる。信じる者を麦、信じない者を殻にたとえて語っている。キリストによる終わりの日のさばきを予告する言葉。

18 人々に福音を伝えた このとき、ヨハネが伝えた「福音」は、救い主がすぐに来られるという宣言であり、それは「喜びの知らせ」でもあった(口語訳では「民衆に教えを説いた」と訳されているが、原文では「福音を伝える」という意味の動詞が用いられている)。

19 領主へロデ ヘロデ大王の息子、ヘロデ・アンティパス(在位BC4年〜AD39年)。兄弟の妻へロディアのこと ヘロデは兄弟の妻をめぐったが、それは律法に反する罪であった(レビ18・16、20・21)(マルコ6・17〜19参照)。

21 イエスもバプテスマを受けられた 主イエスがヨハネから洗礼を受けられたときに起こった出来事は、マタイ3・13～17に記されている。罪なきお方であり、悔い改めの洗礼を受ける必要がない主が洗礼を受けられた。それはご自身が罪人の立場に降りられ、すべての人の罪を身代わりとなって背負われることを示すことであつたつたと解することができる。祈っておられると バプテスマを受けられた後、主イエスが祈っておられたことはマタイの福音書には記されていない。ルカは主イエスが祈られる御姿をこの後も何度か記している(5・16、6・12、9・18等)。天が開け ルカと同様、マタイも「開く」という動詞を用いている(マタイ3・16)。マルコは「(天が)裂ける」という動詞を用いている(マルコ1・10)。同じ表現がエゼキエル1・1にあるが、具体的にどのような現象だったかは諸説ある。それよりも大切なこととは、このとき父なる神様と主イエスとの間の深い交わりを示す出来事が起こり、それをヨハネが目撃したことであろう(ヨハネ1・32参照)。

22 聖霊が鳩のような形をして 鳩は何を示しているかは諸説ある。鳩はイスラエルの民の象徴であり、主イエ

スが新しい神の民の代表されることを示しているという説もある(ホセア7・11参照)。天から声がした 父なる神の御声が聞こえてきたことを表す。あなたはわたしの愛する子 「あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。」(詩篇2・7)と関連する言葉。この詩篇は。王の即位のときに歌われていた。メシア(救い主)の王としての職務が示されている。「愛する」の原語(ギ)アガピトス)は、「ひとりの」、「かけがえない大切な」という意味をも表す。「あなたの子、あなたが愛しているひとりと子イサク」(創世記22・2)の「ひとりと子」は七十人訳(ギリシヤ語)では、(ギ)アガピトンと訳されている。イサクがいけにえとしてささげられたように、主イエスがいけにえとしてささげられることを暗示する言葉でもある。主イエスは神の愛されるひとりと子、神の御子である。わたしはあなたを喜ぶ イザヤ42・1の前半と関連する言葉。

参考図書 熊谷徹「ルカの福音書」『新実用聖書注解』、榊原康夫「ルカの福音書」『新聖書注解 新約1』(以上ののちのことば社)、他

聖書 ルカ4・1〜13

タイトル 荒野の誘惑

暗唱聖句 「人はパンだけで生きるのではない」と書いてある。

目 標 キリストにならない、み言葉に堅く立つて誘惑を退ける。

ルカ4・4

(櫻井めぐみ)

悪魔の誘惑か、それとも神からの試練か

聖書に「試み」という言葉が出てくる時、そこにはとても深い意味が隠されています。その意味の一つは、「悪魔からの誘惑（悪い方に誘い込むこと）」です。そしてもう一つは、「神からの試練」、つまり神様を信じる心を厳しくためられること、です。それではイエス様が荒野で受けられた「試み」は、一体どちらのものだったのでしょうか？ 聖書を見ると、「悪魔の試みを受けられた」と書いてあります。だから悪魔の誘惑であったことは確かです。でも、その言葉の前に「御霊によって荒野に導かれ」とも書いてあります。御霊とは「聖霊」とも呼ばれる、神の霊です。ですから、イエス様が悪魔の試みを受けるように仕向けたの

は御霊であり、それは神様のみこころだったのです。

信じた時から「試み」は始まる

私たちにも「試み」があります。目には見えない悪魔との闘いです。悪魔は別名が「この世の神」とも言います。悪魔は世の中で、みんなが本当の神様を信じないように必死に働いています。ものすごくがんばっているのです。悪魔の本当の狙いは、みんなに悪いことをさせることではありません。神様に対する信頼を失わせ、神様の愛を疑わせようとすることです。「こんな目にあわせるなんて、神さまはなんてひどい！」と思わせようとするのが目的です。だからこの試みは、イエス様を信じよう！と思った時からスタートします。悪魔は、みんなが神様を信じて喜んで生きることを嫌がります。だから逆に言えば、「神様なんか信じない！」っていう人には悪魔は働きかけません。そういう人は悪魔ががんばる必要もなく、放っておいても楽勝だと思われているからです。

み言葉と御霊によって勝利する

イエス様を信じた時から試みが始まりますが、でも怖がる必要はありません。その闘いも、神様によって勝利させていただくことができるからです。イエス様は悪魔の誘惑

にみ言葉によって勝利しました。「人はパンだけで生きるのではない」と書いてある。「私たちのいのちの土台は神のみ言葉であること。」「あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい」と書いてある。「生けるまことの神だけを礼拝すべきこと。」「あなたの神である主を試みてはならない」と言われている。」神は、私たちがテストして見る存在ではなく、信じるべきお方であること…。主はみ言葉によって勝利されました。しかしもう一つ、イエス様が誘惑に勝つために必要な「お方」がいました。それは御霊です。イエス様はすでに御霊に満たされていました。イエス様は神の御子であるにもかかわらず人ととなり、人間としての生活をしてこられたので、無限に豊かな御霊を受けが必要があったのです。イエス様は御霊の力によって試みに打ち勝ち、福音を宣べ伝え、御霊の力によって十字架に死に、御霊の力によって復活されました。イエス様がそうであるならば、もともとの人間である私たちが試練や誘惑に勝つためには、み言葉と御霊が絶対に必要なんです。

十字架のイエス様

人生にはいろいろなことが起こります。でも、試練や闘いがあってこそその人生なのです。イエス様は荒野で勝利さ

れましたが、後で再び試みられる時がやって来ます。それは十字架にかかられる直前のことです。イエス様は父なる神様に「みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。」と祈りました。イエス様は神の御子ですから、その気になれば天使たちに守ってもらい、十字架にかからずにすむこともできたのです。でも、もし十字架がなければイエス様の救い主としてのみわざは完成しません。だからイエス様はその誘惑を退けて、十字架の道を歩まれました。徹底的に神のみこころに従い、誘惑を克服されたからこそ主は「信仰の完成者」とも呼ばれています。主が十字架にかかることなくして救いは完成しませんでした。そして今、私たちがあう試練や誘惑はみなイエス様が克服されたものばかりです。イエス様は試みにあわれて、それが主を信仰の完成者として全うさせました。同じようにみんなの試練も、もつと深く、もつと強く神様を信じ成長させるためものです。恐れず神様に信頼し、自分の力ではなく神様によって―み言葉と御霊によって―勝利させていただきましょう。

♪主われを愛す♪（新聖歌505）

聖書 ルカ4・1～13 テーマ 荒野の誘惑

序論

(小泉 創)

主イエスは公生涯を始めるにあたり、私たちと同じように洗礼をお受けになり、荒野にて悪魔からの誘惑を受けられました。「聖霊に満ち」た主イエスが、「御霊によって荒野に導かれ」、誘惑にあわれたのです。ましてや私たちの信仰生涯が誘惑と無縁のはずはありません。主がどのように誘惑に打ち勝たれたかを学びましょう。

一、第一の誘惑

四十日にわたる断食によって空腹になられた主に、悪魔の最初の誘惑がおそいかかります。悪魔は「あなたが生神の子なら」と、近づいてきます。3章の洗礼の場面で神が宣言なさった「あなたはわたしの愛する子」という言葉を逆手にとっての誘惑です。悪魔はキリストがどのようなことでもなし得ることを知っていましたので、この石に、パンになるように命じなさい」と言ったのです。石をパンに変える奇蹟は、多くの人にとってへよきしら

せ)にみえるでしょう。グローバルな格差社会に住む私たちは、飢餓の問題、暴力の問題、金銭的搾取、性的搾取の問題など、多くの問題に取り囲まれています。目の前の課題に具体的な解決をもたらすことができたら、その素晴らしいさをあらわせるのにと歯がゆく思ったり、それができない教会があまりにも無力であるように思うことがあられるかもしれません。そのようなとき、私たちに目の前にパンがないことが問題なのだ、とささやきかけられているのではないのでしょうか。

しかしイエスは悪魔の言葉を拒み、旧約聖書・申命記8・3の言葉を引用しました。(人はパンだけで生きるのではない)。人々の必要を軽んじることはありませんが、本当の意味で人を生かしていのちを与えるのは、神の言葉であることこそ見失ってはなりません。

二、第二の誘惑

悪魔はイエスに、自分にひざまずくならば、世界中の国々の権力と栄光を与えると告げます。神の子に向かって、自分を拝めというなど、正気の沙汰ではありません。私たちも悪魔崇拜はせずとも、知らず知らずのうちに繁

栄を求め、「ご利益信仰」に陥ってしまうならば、その行きつく先は偶像礼拝です。この誘惑に陥って、どれほど多くの人々が信仰の道を踏み外してきたことでしょうか。全ての物を得るようになって、それは全ての物を失う虚しい道なのです。イエスは申命記6・13を引用して、この誘惑を退けられました。「あなたに神である主を礼拝しなさい。主のみ仕えなさい」。神だけを礼拝し仕えることに徹し、偽りの権力、栄光に心を奪われないことです。

三、第三の誘惑

最後に、悪魔はイエスをエルサレムの宮の頂上に連れて行きました。そして、「神の子なら」ここから下に身を投げなさい、神は必ずあなたを守ってくださいから、と詩篇91篇のみ言葉を引用して誘惑したのです。このように、悪魔のみ言葉に通じています。本来この詩篇は、主を避け所とする者が、日々歩く道で守られるという信頼を歌ったものです。あえて危険な中に飛び込んで、神に対して無謀な試みをすることを勧めてはいけません。神の名を用いて、聖書をねじ曲げて不健全なところへと導く

のは悪魔の常套手段です。創世記のエデンの園のときからずっと、悪魔は巧妙に嘘を織り込みながら、人を神とその御言葉から引き離そうとしてきました。

主イエスはここでも申命記6・16を引用します。「あなたに神である主を試みてはならない」。私たちの神は試みる必要などない、信頼して間違いないお方です。

悪魔の誘惑は十字架の場面でも主に襲い掛かりました。人々を通して、おまえがキリストであり、王であるなら、十字架からおりてみよ、自分とおれたちを救え、とあざ笑ったのです。それは神に信頼し、従うことをやめさせようとする誘惑の声でした。しかし、主イエスは十字架からおりることをなさらず、苦難の道を歩み切って勝利してくださいました。主は私たちにも、真実な神に信頼し従い続けるようにと、招いておられます。

結論

イエスは神のみ言葉によって、悪魔の誘惑に勝たれました。私たちもみ言葉を健全に理解し、心にたくわえましょう。そして嘘に満ちた悪魔の誘惑に勝利しましょう。

研究資料

(辻林和己)

バプテスマのヨハネから洗礼を受けられた主イエスの上に聖霊が降って来られた(ルカ3・21～22)。その後、主は、宣教の働きを始められる(ルカ3・23)。次に聖霊は主を荒野に導かれた(ルカ4・1)。

今回の箇所は、荒野で主イエスを試みる悪魔の言動とそれに対された主の言葉が記されている。並行箇所はマタイ4・1～11。

テキスト

1 聖霊 原語では〔ギ〕ブネウマトス・ハギウー(聖なる霊)。**御霊** 原語では「霊」を意味する〔ギ〕ブネウマが用いられている。「御霊によって」は、悪魔の誘惑も神の計画と御守りの中での出来事であることを示している。

2 四十日間 出エジプト後、イスラエルの民が荒野を四十年間、旅したことに関連していると考えられる。マナによって民は空腹を満たされたが、神に反逆した。そのことにより四十年間、荒野でさまようことになった(民数14・34～35)。それに対し、主イエスは四十日間何も食べられなかったが、神に従い通された。**悪魔** 原語は〔ギ〕

ディアボロスで「中傷者、誹謗者」の意。

3 あなたが神の子なら 原文は「あなたは神の子なのだから」という意味の断定の条件文である。神は主イエスに「わたしの愛する子」と言われた(ルカ3・22)。悪魔も主が神の子であることを知っていた。この石に、パンになるように命じなさい。神の子として自身の力によって、自分の飢えを満たしたらよいではないか、そして、その力によって飢えている人々を助け、メシアとしての使命を容易に達成できるではないか、と悪魔は主イエスを誘惑した。

4 人はパンだけで生きるのではない 申命記8・3からの引用。マタイ4・4では、この後に続く「神の口から出る一つ一つのことばで生きる」も記されている。人間にとってパン(食料)は大切であるが、パンだけでなく人にとって必要なすべてのものを与えて下さる神を知り、神の言葉によって魂の養いを得ることがもつと大切である。3節の悪魔の提案は、この神への信頼を抜きにしてパンを得させようとする誘いであった。と書いてある。主イエスはこのときもこの後も、旧約聖書の言葉を引用して悪魔の言葉に答え、誘いを退けられた。

5 高いところに マタイ4・8では「非常に高い山」と記されている。一瞬のうちに この言葉はマタイ4・8に記されていない。記者ルカは、この言葉によって、このとき悪魔が主イエスに見せたものは幻であったことを暗示しようとしているのかもしれない。

6 それは私に任ざれていて 人間の罪のゆえに国々の権力が悪魔の支配下にある。悪魔は主イエスに対し、権力で地上に神の国を打ち立てるようにと提案している。

7 もしあなたが私の前にひれ伏すなら 悪魔は自分に服するならすべての権力と栄光を手に入れることができると誘惑した。

8 あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい 表現が主イエスはこのときも申命記の言葉(6・13)を引用して答えられた。悪魔の支配は一時的なものであり、すべてを「支配しておられるのは神である。礼拝と奉仕は神にのみささげられるべきものである。

9 ここから下に身を投げなさい 神の子であるあなた自らが危険な状況を作り出しても、神はそこからあなたを助けるだろう。その奇蹟をもって自分がメシアであることを明らかにせよ、という悪魔の誘惑。

11 と書いてあるから 10〜11節は、詩篇91・11〜12の引用。この聖句は本来、神への深い信頼を表明するものであるが、悪魔はこれを利用して主イエスを罪に誘った。

12 あなたの神である主を試みてはならない 申命記6・16の言葉。神に自分の思い通りにしてもらおうとするなら、それは神の主権を侵すことになる。主イエスは誘惑を退け、どんなときも神の主権にみずからをゆだね、神に信頼されるご自身の姿を示された。

13 あらゆる試みを終えろと 悪魔のあらゆる種類の試みにも主イエスは打ち勝たれた。しばらくの間イエスから離れた 悪魔は、この後も主イエスを陥れようと計る。特に主の十字架への道を回避させようと働きかける(マタイ16・23、マルコ8・33等)。しかし、主は聖霊の力と聖書の言葉によってその試みを退け、神への全き従順と信頼の道を歩み続けられる。

主イエスは、(旧約)聖書の言葉に従って歩まれた。私たちも主にならい聖書の言葉に堅く立ち、従う歩みを続けていく(エペソ6・17等)。

参考図書 4月18日分と同じ。

聖書

ルカ5・1〜11

タイトル

弟子への招き

暗唱聖句

彼らは舟を陸に着けると、すべてを捨ててイエスに従った。

ルカ5・11

目 標

自分の無力と罪深さを覚え、キリストに従う。

「召命」について

(櫻井めぐみ)

教会で使われている難しい用語の中に、「召命」とか「召し」という言葉があります。今日の聖書の話は、ペテロたちがイエス様から「召命」を受けた場面です。召命とは、漢字では「命を召す」と書きます。「召す」とは呼ぶとか、招くという意味です。つまりペテロの命は、イエス様に呼ばれ招かれたということです。そのイエス様の招きに、彼らは「すべてを捨てて」従いました。

すべての人に与えられる召命

ペテロは魚を捕る漁師だったのですが、これからは人間を捕る、つまり人々にイエス様のことを伝え、人々をイエス様のもとに導く者になると告げられました。しかしこれは、ペテロや一部の人だけに言われたものではありません。

ません。イエス様はすべての人をご自分の弟子として招いているのです。そして召命は、将来どんな職業にいたとしても、みんなにそれぞれ与えられているものです。たとえ教会の牧師先生にならなくても、自分の命と人生をイエス様のために用いて行くよう、みんなが招かれているのです。

私は罪深い人間です

イエス様の招きに応答して弟子となり、従って行くために必要なことがあります。それはイエス様がきよいお方であること、でも自分は罪深い人間であると自覚することです。ペテロは、「私は罪深い人間です」と告白しましたが、彼はなぜ自分が罪人だと知ることができたのでしょうか。それは、神の圧倒的な力を見せられたからです。ペテロはプロの漁師でした。それなのに、一晩中働いても一匹の魚も捕れませんでした。でもイエス様のことばに従ってやってみた結果、網が破れそうなほど魚が捕れたのです。イエス様はペテロよりもスキルが上だったというわけではありません。イエス様は漁師ではありませんでした。しかしイエス様は神の御子であり、全能のお方です。ペテロはその神の力を見せつけられ、自分が無

力であり、本来神に近づくことのできない罪人であることを思い知りました。イエス様の弟子になるには、自分が無力な罪人であることを認めなければなりません。

すべてを捨てて

そうしてペテロは、「すべてを捨てて」イエス様に従って行きました。しかし現実、日々の生活は一体どうなったのでしょうか。家族はどうなったのでしょうか。イエス様に、すべてを捨てて従って行くならば、家族と離れことになるかもしれません。また、漁師の仕事はやめてしまったのでしょうか。しかし、ここで聖書が言う「捨てる」とは、委ねるとか、明け渡すという意味なのです。だから「わたしについてきなさい」というイエス様のことばに従って行く時、主は私たちの生活の全責任を負ってくださるのです。だから、大丈夫なんだ、心配しなくてもいいのだと、イエス様は約束してくださっているのです。ただし、人生の中で、イエス様に従うために、自分の願いや大切なものを「捨て」なければならぬ時があります。その時は確かにつらいかもしれませんが、でも、自分が大事だと思うものを「捨て」、「委ね」、「明け渡し」た時に、実はそれをイエス様が守り続けてくださっ

ているのです。自分ではなく。ペテロだって、すべてを捨てて従ったのですが、彼の生活や家族を本当の意味で守っていたのは、ペテロではなくイエス様でした。イエス様は前に、ペテロの病気を治していました。だからすべてを捨ててイエス様に従って行く時に、私たちは本当は何一つ失うものはないのだと気づくのです。

イエス様に従う

みんなには将来の夢がありますか？ 大人になったらこういう職業につきたい、という願いがあるでしょうか。まだない、わからないっていう人もいるかもしれませんが、楽しみですね。自分の進路や将来のことについて、今から祈っておくのは大切なことです。でも、覚えておいてほしいのです。イエス様に従うことによって、もしかしたら自分の願いではない方に導かれるかもしれないということ。でもイエス様は「恐れることはない」と言われています。イエス様はみんなを愛していますから、どんなことになってもみんなにとって必ずいいようにしてくださいます。みんなのことを誰よりも愛しておられる神様に信頼して、従って行きましょう。

♪神の御子にます♪(新聖歌397)

聖書 ルカ5・1～11 テーマ 弟子への招き

序論

(石田高保)

この箇所は、イエス様が最初の弟子を招いた出来事を記しています。主はまずペテロとアンデレの兄弟、ヤコブとヨハネの兄弟という4人の漁師を弟子にしました。

一、人の中に神の計画を見る

漁師は魚を取ることに全身の神経をとがらせます。寝ても覚めても、明けても暮れても魚を取ることを考えています。おそらくガリラヤ湖のことは、どこに魚の群れがあるか、季節による風や波の具合はどうか、どんな道具が適切かなど知り尽くしていたことでしょう。その彼らに向かってイエス様が「あなたは人間を捕るようになるのです」と言われたとき、別の意味の漁師になれることに心を揺さぶられたでしょう。だからこそ彼らは生きる糧である網や舟をあつさりと捨てることのできたのではないのでしょうか。ミケランジェロは教会の建設現場に転がっていた大理石を見たとき、そこから青年ダビデの像を彫り出そうというインスピレーションを受けたそうで

す。熟練の漁師たちとは言え知識階級ではなかった彼らを主はいつもそばに置きました。イエス様の在世中は彼らはヒーローではありませんでしたが、ベンテコステから本領を発揮します。使徒たちは教会の基礎を造り、彼らの書いたものは聖書となって二千年間、全世界で読まれていることは驚嘆すべきではないでしょうか。

弟子になつてからペテロは3年半、イエス様に仕え、また30年あまりにわたって諸教会を導くことになりました。その間、激しい迫害に何度も会いながらもぶれることがありませんでした。最期は殉教したと言われますが、死に至るまで忠実であることができたのも、きょうのみ言葉の力でしょう。ヨハネに至ってはパトモス島に流刑となり、死なない殉教をして長寿を全うしたそうです。

「イエスはシモンに言われた、恐れることはない。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです」、イエス様は二千年の時を超えて私たち一人ひとりに語っておられます。人の心をグッと掴めるクリスチャンにしてあげよう。これは必ずしも説得力のある話ができるというわけではありません。またカリスマ的に人を引き付ける力を与えようというのでもありません。たとえば、あな

たと一緒にいると心が安らぐという人にしてあげようというのです。あなたに話を聞いてもらったら気持ちが悪くなったと言われる人、何か希望が湧いてくると言われる人、もう一度やり直してみようと力が出てくると言われる人にしてあげようというのです。

二、神の計画にかかわる

このようにして主に召された弟子たちは、主の働きに参加するようになります。「イエスはガリラヤ全域を巡って会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病、あらゆるわずらいを癒された」(マタイ4:23)。これはイエス様のお働きを要約したもので、ここに三つのテーマが見て取れます。これは奇しくも大宣教命令と同じです。「あらゆるわずらいを癒された」、これは人の必要に応える愛のわざをすること。「御国の福音を宣べ伝え」、これは福音を語ることによって人を救いに導くこと。「諸会堂で教え」、これは聖書に基づいて信仰者がどのように生きるべきかを教えること。ノンクリスチャンはクリスチャンの愛に触れることによって神を知り、イエス様を受け入れて救われます。その人が聖徒として整えられて、今度は自分にされたことを他の人に

してゆくこと、このような普通のクリスチャンが取り組む再生産のプロセスこそが主のご計画でした。

初めはイエス様がこの三つのこと、愛のわざ・伝道・育成を全部ご自分でしておられました。途中から弟子たちを二人一組にして各地に遣わし、同じことをさせておられます。そのとき弟子たちにご自分の権威を授けて、ご自分と同じことができるように力づけておられます。主は十二人に集中して弟子づくりをし、彼らが他の人を弟子として育てられるように、3年半でこれをやり遂げなさいました。もしいつまでもイエス様がそれを一人ですべていたら、何十年たってもユダヤを福音で満たすことはできなかつたかもしれません。

結論

私たちの身近に接する人々に対して、唐突に伝道することは適切ではないかもしれません。しかし聖霊に満たされた愛のわざなら、歓迎しない人は少ないでしょう。人は宗教は歓迎しなくても、愛の行いは歓迎するものです。誰もが人間を捕るたましいの漁師として用いられます。そのようにして築き上げた信頼関係の中で、自然体で証しをしてゆきましょう。

研究資料

(中島啓一)

テキストト

1 群衆が神のこばを聞くこととして…押し迫って来た「神のこば」は「神の国の福音」(4・43)。それを聞くために来るのは良い態度だが、それだけでは不十分(8・4～15参照)で、この後のシモンのような主体的応答が不可欠。ゲネサレ湖 ガリラヤ湖(マルコ1・16)。

2 小舟が二艘ふたふね 大きな網で効率よく漁をするために、普通2艘以上の舟でチームを組んで働いた。舟から降りて網を洗っていた 漁を終えた後は、たとえ不漁でも、次回に備えて網を洗い、繕っておく必要があった。

3 シモン 彼は先に、その姑の高熱をイエスに癒いやすしてもらっている(4・38～39)。舟に乗り…教え始められた押し寄せてきた群衆が多く、適度に距離をとる必要があったのである。さらにその状況は、音響的に円形劇場のような効果をもたらし、イエスの声をずっと聞きとりやすくしたと考えられる。日頃はシモンたちが魚をとる舟の上で、イエスはこのとき「人間を捕る」(10)働きをされたのである。

4 深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい 前節では「陸から少し漕ぎ出すように」とあったのに対し、ここは「深みに漕ぎ出し」とあるのを、ユダヤ人宣教と異邦人宣教の対比としてとらえる解釈もある。

5 先生 一般的な教師(ギ)ディダスカロス)ではなく、ここでは(ギ)エピスタテース(主人、上に立つ者の意)が用いられている。ルカは前者を客観的な「先生」の意味で用いるのに対し、後者は、相手の権威に対する主観的・個人的な感服が内包されている表現である。夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした 魚の捕れやすい夜間でも不漁であったのだから、日の昇った今ではなおさら捕れるはずがないという気持ち言外に表れている。おこばですのぞ イエスの言葉に内在する権威を指し示す表現。イエスの言葉を間近で聞いたシモンは、半信半疑の中にも、姑にも癒いやすしをもたらしたその言葉に得も言われぬ権威を感じ取っていたのだろう。網を下ろしてみましよう 当時のユダヤ社会では、教師がその専門分野について命じるときには従うべきという風潮があった。裏を返せば、そうでないことについては従う必要は無かったのである。シモン・ペテロから見ても、イエスは

漁の素人であった。それゆえ、この応答は、自発的な側面も含まれる、ある種の服従と見ることができよう。

6〜7 おびただし数の魚が入り、網が破れそうに…別の舟：両方とも沈みそうになった 奇跡の素晴らしさが複合的な表現を用いて証言されている。このようなイエスによる増殖の奇跡は、旧約に前例を見出し得る（出エジプト8・6、列王下4・1〜7等）。

8 主よ [ギ]キュリオスは一般的な「主人」をも意味し得る語であるが、ここでは1・43や2・11のような「いと高き主」を意味するであろう。私から離れてください。

私は罪深い人間ですから 半信半疑で従ったことに対する後ろめたさもあつたであろうが、それだけではない。すなわち、イエスの神的な権威に圧倒されたシモンは、自分の罪深さを認めるしかなかったのである。神の臨在に触れたとき、あのイザヤでさえ絶望の叫びを上げざるを得なかった（イザヤ6・5）。イザヤの場合と同様、ここもまたシモンにとつての召命の場面となった。

10 シモンの仲間の、ゼベダイの子ヤコブやヨハネの3人は8・51、9・28でも揃って登場する。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです その言葉によ

て万物を支配されるイエスが宣言するならば、それを成し遂げるためのすべての力も添えて与えられ、実現する。ここでは[ギ]ゾーグローン（直訳「生きたまま捕らえる者」）という語が用いられている。エレミヤ16・16を想起させる表現だが、そこで描かれる情景が差し迫つたさばきであるのに対し、ここでは主題がそのさばきからの救いへと移り変わっている。神のみ心は、さばきではなく救いにあるのであり、それゆえ、恐れることはない とシモンに語られたのである。イエスが命じるならば、恐れさえも消え去る。モーセやダビデがその使命を果たす上で、かつて羊飼いであった経験が役立つたのと同様に、ペテロが新しい使命を遂行していく上で、主は漁師としての彼の経験をも用いてくださるであろう。

11 すべてを捨ててイエスに従った 当時の漁師の収入は一般の平均以上だったと言われている。それを含めたいっさいを捨てるという態度には、新しい出発に向けての根本的な服従の意志が表されていると言える。

参考図書 注解書 ELLIS (NCB), Marshall (NIGTC), Nolland (Word), 榊原康夫（新聖書注解 新約1）。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

ルカ2・41〜52

タイトル

両親に仕えるイエス

暗唱聖句

それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた。

ルカ2・51

目標

両親を大切にし、助ける者となる。

導入

(土屋開夫)

今日は母の日です。来月には父の日もあります。母の日や父の日というのは、お母さんやお父さんに対する感謝の気持ちを特に覚えるために、どちらもアメリカの教会で百年以上前から始まりました。そう、教会から始まったんですね。

二種類の親

ところで皆さん、私たち人間には二種類の親がいるんですよ。分かっていますか？ 一つは、霊(魂)の生みの親である「父なる神様」です。もう一つは、体の生みの親である、人間のお父さんとお母さんです。

聖書には、このどちらの親も大切にしないさい、と教え

ています。みんなもよく知っている「十戒」を思い出して下さい。最初の1番目から4番目は、一言で言うと、「父なる神様を敬いなさい」という教えです。

そして、それに続いて5番目に、「あなたの父と母を敬え。」という教えが続いています。

ですから私たちは、まず霊の親である「父なる神様」を敬い、続いて人間の両親を敬うことが、とっても大事なことです！

子どもの時のイエス様

さて、子どもの頃のイエス様はどうだったのでしょうか。今日の聖書の箇所は、イエス様が子どもの時の様子が分かる、とても貴重な箇所です。イエス様もみんなと同じように、赤ちゃんの時もあれば小学生ぐらいの時もあったんですよ。だからイエス様には、子どものみんなの気持ちがよく分かります。そしてイエス様は子どものお手本でもあるんですよ。

イエス様が12歳の時、「過越の祭り」を祝うために、人間の両親であるヨセフさんとマリアさんと一緒にエルサレムに行きました。国中の多くの人がエルサレムに集ま

ります。親戚のおじさん、おばさん、ご近所の人たちもみんな一緒にゾロゾロと旅をします。

やがて祭りが終わり、またみんなで自分の町までゾロゾロと帰ります。ヨセフさんとマリアさんは、当然、息子のイエス様も近くを歩いているだろうと思っていました。ところがイエス様の姿が全然見当たりません！ヨセフさんとマリアさんは三日間も探し回り、なんとエルサレムの神殿にいたイエス様を見つけました。

マリアさんはビックリして、「心配したじゃないの！捜していたのよ！」と言うと、イエス様は「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」と答えました。イエス様にとって「霊の親」は勿論、父なる神様です。そして、神様を礼拝する場所である神殿は「父なる神様の家」であり、子どもであるイエス様の家でもあったのです。

でもこの後、イエス様は人間の親であるヨセフお父さんとマリアお母さんと一緒にナザレの家に帰り、この両親を敬い、お父さんの大工仕事や、お母さんの家事のお手伝いをしたり、弟たちの面倒も見えてあげた事でしょう。

最初に言った通り、イエス様は霊の親である父なる神様を敬い、愛し、そして人間の両親も敬い、愛していたのです。

まとめ

みんなのお父さんやお母さんは、神様のようにには完全ではないでしょう。あなたが悪くない時でもイライラして怒ってしまったたり、ガミガミうるさかったり、間違いや失敗、言い過ぎ、やり過ぎもあるかも知れません。

それでも、神様があなたに与えて下さった両親です。そして、神様のように完全じゃないけど、足りなさもあるけど、子どもであるあなたのために一生懸命、時には必至になって、色んな事をしてくれているのです。

どうぞ、父なる神様を敬い、そしてお父さんとお母さんを敬い、大切にし、愛してください。イエス様がそうされたように！

♪わたしのよように♪ (ホ98、イン75)

聖書 ルカ2・41〜52 テーマ 両親に仕えるイエス

序論

(石田高保)

福音書は、イエス様のお生まれになったことについてはかなり詳しく書いていますが、その後の30才までの生涯については、たった一つのエピソードしか明らかにしていません。(母はこれらのことをみな、心に留めておいた)とあるので、ルカはマリアに直接取材したようです。ルカはそのほかマリアから主の生い立ちについてはいろいろ聞いていたはずですが、しかし採用したのは今日の箇所だけなのは、ここが私たちの信仰の成長のためにどうしても欠かせない出来事なのでしょう。

一、神の子としての目覚め

ここではイエス様が12才であったと明らかにされています。当時の習慣では男の子の12才は成人式を行い、大人の仲間入りをする年齢でした。主は郷里へ戻る両親や親戚の一行についていかないで三日間も神殿の中で過ごしていました。このことは常識から言えば問題なのですが、神様にはご計画がありました。主は当時第一級の学

者たちと聖書について問答をしていましたが、彼らはその知恵深さに驚嘆しています。

主は言われます、(どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であること、ご存じなかったのですか)、これは謎めいた言葉で、(しかし両親には、イエスの語られたことが理解できなかった)というのも無理はありません。イエス様はヨセフが本当の父親ではなく、神こそが自分の父であることをこの時点で悟っていたことは明らかです。まるで「エルサレムの神殿こそ、自分の父なる神の家である。だからそこに居残っているのもそれは当然の成り行きである」と言おうとしているのかのようです。この出来事は主の生涯において重大です。12才の時点でイエス様はすでに自分が神の子であることに目覚めたことになるからです。これまでは家族と一緒に帰っていました。しかしこの時を境に神の子の自覚をもって生きるようになりました。なお救い主としての使命を示されることは18年後の30才まで待たなければなりません。

私たちも、イエス様を受け入れたとき、神の子とされたことに目覚め、神の家族に入れられ、そこからクリス

チャンとしての成長が始まりました。私たちも父なる神様の子ですから常に父の家に住んでいることになりま
す。教会だけでなく、私たちが家庭にいるとき、そこは父の家です。私たちが職場や学校にいるとき、そこも父の家です。どこに行こうとも、そこは父の家なのです。

二、神の子と人間の前半生

49節は、二日間も心配で探し回った両親に対する言葉としては理解に苦しみます。イエス様は真実を語っているのですが、両親にはその意味を悟ることができません。だからと言ってイエス様は両親をさげすんだわけではなく、(それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた)、これはイエス様の30才までの生き方をまとめています。自分は神の子だからほかの人間とは比べようもなく偉いのだとは思わず、ヨセフの大工仕事を見習い、その後やもめとなった母と弟や妹たちを養いました。収穫期には季節労働にも行かれたかもしれ
ません。天地を創造した神であり、人類の救いを完成することになる神の子が、名もない一庶民としてこの地上を歩むとは、誰が想像できたでしょうか。

子どもに対する聖書の教えは「子どもたちよ、すべて

のことについて両親に従いなさい。それは主に喜ばれることなのです」(コロサイ3・20)です。子どもが親に従うようにしつけることは、その子の生涯にわたって祝福となります。なぜなら親に従うことを身につけた人は、上に立つ人を敬うことができるようになるからです。学校の先生、クラブの先輩、職場の上司など、上に立つ權威に従うことができる人は、おおむねその道で成功できると言われます。イエスは神と人といつくしまれ、知恵が増し加わり、背たけも伸びていった、神様の約束だからです。親に従うことを身につけた子どもは、究極の權威である神に従うことができます。ところが親に従うことを身につけ損なった人は、行く所々の上に立つ人に従うことができず、概して人間関係は空回りするよう
です。反抗心が異常に強いと、組織では長続きしません。ですから親たる者は自分の子どもが神に従い、自分より上の權威に従えるように育てるといふ長期的な視野を持って臨みたいものです。

結論

人に仕えることをとおして神に仕えることがあります。そのチャンスはどこにでも転がっているのです。

研究資料

(小平徳行)

この個所は聖書中イエスの少年時代のエピソードを記す唯一の記事である。

テキスト

41 過越の祭りに毎年エルサレムに行っていた 律法によれば、イスラエルの成年男子は年三度の宮もうでをするように定められていたが、この時代には、遠隔地の人々は過越の祭りのみに参加する習慣になっていた。過越の祭りはイスラエルのエジプト脱出を記念する祭り（出エジプト12・1〜20）でアビブの月（太陽暦の3〜4月に相当し、後にニサンの月と呼ばれる）に7日間かけて行われていた（申命記16・1〜8）。

42 イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習にしたがって都へ上った 男子は13歳から律法を守る成人と数えられるので、前年にその予習をさせるのが父親の義務であった。このことはイエスが律法の下に生れ、人間が神の前に置かれている立場に立たれたことを表している（ガラテヤ4・4）。

44 一行（ギ・スノディア）とは「共に道を行く人々」

のことで、同郷の村人や親族、知人と一緒に都へ上って来た巡礼団。一日の道のり 数十キロ程度。

46 イエスが宮で教師たちの真中に座って、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた 当時、学者は教師の足もとに座って、話を聞いたり質問したりするならわしであった。

47 驚いていた この言葉は本福音書において、神の力が表された時に伴う人々の反応として用いられている（5・26、8・56等）。イエスの知恵は、神の恵みによる特別なものであった。

48 両親は彼を見て驚き この時イエスは両親にとって全く思いがけないところにおられた。心配して この語は、罪人が死後行く黄泉の火炎で「苦しみもだえる」時にも使われている（16・24〜25）。両親がこれほどの思いで捜し回ったのは、一行からはぐれると、身の安全が保証できないからである。良きサマリヤ人のたとえ話（10・25〜37）にあるように、エルサレムからエリコへの途上で強盗に襲われる可能性があった。人々が一行で移動するのは、このような危険から守るためでもある。

49 ここはイエスの公生涯以前の唯一の記された言葉で

あり、本福音書における最初のイエスの言葉である。わたし**が自分の父の家にいるのは当然であること**。神を「自分(わたし)の父」と呼ぶのは他に類を見ない特異なこと。通例は「われらの父」など。前節でマリヤがヨセフをさして「お父さん(直訳―あなたの父)」と語ったのに対して、イエスは神を「自分の父」と述べている。これはイエスと神との関係が特別であることを示すもので、イエス自身による「神の子」宣言である。父の家直訳するなら「父に関わること」。イエスは、自分は神に**関係のある所**にいるのが当然ではないかということ。当然である。この言葉は「神の必然」を表現し、キリストの受難予告(9・22)においても用いられ、「必ずしする」と訳されている。**ご存じなかったのですか**。かつて御使ガブリエルがマリヤに神の子を産むことを告知したにもかかわらず、知らなかったのですかということ。このことは少年イエスが12歳で既に天の父の定められた道に**自覚的に歩み始め**られていたことを表している。

まで自分たちに起った様々な事柄と、今回のイエスの言葉とを合わせて考えることができなかつた。しかし、ガブリエルや羊飼いのたちの証言、シメオンやアンナの言葉を総合して考えるなら、確かにイエスは神の子であり、神殿はイエスの父の家なのである。

51 **仕えられた** は「服従させる」(ギ)ヒュポタッソ) という言葉から来ており、イエスは両親に服従する立場に自らを置かれ、継続的に仕え続けられたことが表現されている。イエスは十戒の第五戒を實踐された。このイエスの従順さは公生涯に入る約30歳まで、人々からは単に「ヨセフの子」と思われるほどに徹底していた(3・23、4・22)。神の子であるお方が、人間であるヨセフとマリヤと一緒に下つて、彼らに仕えられたところに、神の子イエスのへりくだりがある。これは、ある人々にとっては、キリストに対するつまずきにもなつた。

参考図書 熊谷徹「ルカの福音書」『実用聖書注解』、榊原康夫「ルカの福音書」『新聖書注解・新約1』(以上いのちのことば社)、宮平望「ルカによる福音書 私訳と解説」(新教出版社) など

聖書

詩篇23・1〜6

タイトル

神様はわたしの羊飼い

暗唱聖句

主は私の羊飼い。／私は乏しいことがありません。
詩篇23・1

目 標

主を羊飼いとして生きる生涯の幸いを知る。

導入

(後藤 真)

みなさんは羊飼いがどんなふう羊を飼っているのか見たことがありますか。遠くまで広がる、一面緑の草原でたくさん羊が草を食べていて、羊飼いは羊を導いているというような様子を思い浮かべますか。

たしかに北海道やニュージーランドなどではそんなふうに羊を飼うことができます。ところが聖書の舞台はイスラエル。イスラエルは雨が少なく、水辺や草を見つめるのはひと苦労でした。

主はわたしの羊飼い

1節をみなさんで読んでみましょう。(みんなで読む)。主というのは神様のことです。神様は羊飼いです。だれかの羊飼いではなく、わたしの羊飼いです。

この詩の作者はダビデです。ダビデはイスラエルの王様ですが、子どものころは羊飼いをしていました。だから、草や水の少ないイスラエルで、羊飼いをするのがどんなに大変かよく知っていたのです。

それに羊は弱い動物です。獣にやられたらひとたまりもありません。おくびようで、群れを離れて一匹だけで行動することもできません。だから羊飼いはかならず羊飼いに導いてもらわなければ生きていけないのです。

作者のダビデは、王様でした。家来たちに命令すればみんな自分の思い通りにすることができました。でも、ダビデは、自分は羊のように弱い者だ、羊飼いの神様がいるから乏しいこともなく、安心だということです。神様がわたしの羊飼いということも大切ですが、わたしが神様の羊ということも大切なことなのです。

大変なときも

次に4節をみなさんで読んでみましょう。(みんなで読む)。「死の陰の谷」なんてこわいことばが出てきます。イスラエルには深い谷があつて、そこに獣が隠れているということがあつたそうです。羊飼いは、そんな危ないところを通るときにも羊を導かなければなりません。羊

飼いである神様はわたしたちが大変なときも、敵を追い
払うむちと杖で、わたしたちを守ってくださいます。

また羊飼いは、羊が間違った道に行こうとしたら杖で
たたいて止めることもあったようです。羊飼いである神
様はわたしたちが罪を犯してしまうときには、それを教
えて悔い改めの道へと導いてくださいます。

羊飼いは、ただ草や水のある方に導くだけではありません
せん。敵から守り、大変なときにも羊といっしょにいて
くださるのです。

追いかけてくる恵み

次に6節をみなさんで読んでみましょう。(みんな
読む)。この詩のしめくりは、わたしたちが生きてい
るときはいつでも、いつくしみと恵みがわたしを追いか
けてくるという約束です。羊飼いである神様はわたした
ちに良いことと愛を毎日与えてくださるのです。

神様の方がよいものをもってわたしたちを追いかけて
来てくださるのです。わたしたちが礼拝を休んだり、教
会に行かない日があったりして神様を忘れそうになっ
ても、神様はわたしたちを忘れません。

詩の作者のダビデは、王様でしたがごちそうを食べた

り、楽しいことをしたりして遊ぶことよりも、主である
神様の家に住むことを喜びました。神様の家というの
は、神様といっしょにいられる場所のことです。それは、
ダビデの時代は神殿でした。わたしたちにとっては、お
祈りしたり、聖書を読んだり、礼拝したりして神様といっ
しょにいることです。

さて、今日は何度かいっしょに聖書のことばを読みま
した。最後にみなさんにチャレンジしてもらいたいこと
があります。それはこの詩篇23篇を全部覚えること
です。先生たちもです！ というのは、この詩篇には大切
なことがたくさん書かれているからです。

この詩篇を覚えているとピンチのときにも神様が助け
てくれることを思い出して安心できます。罪を犯してし
まったときにも、悔い改めて正しい道に戻ることができ
ます。わたしたちは、神様の羊なので、羊飼いの
神様とずっといっしょに進んでいきましょう。

♪歩こうイエスの道を♪ (PW15、イン81)

聖書 詩篇23・1〜6 テーマ 主は羊飼いです

序論

(石田高保)

詩篇の中で23篇ほどクリスチャンの口にはのぼるものも少ないでしょう。なぜそれほどにも愛されているのでしょうか。それは思うに主の圧倒的な恵み深さが心に迫るからだと思います。全世界、全時代のクリスチャンが心の支えにしてきたみ言葉と言ってもよいでしょう。

一、主の養い

1節は23篇の中心テーマで、これは作者ダビデの信仰告白です。羊は羊飼いにまったく依存しています。羊飼いがいなければ生きることができないほど世話がいらまです。あまりにも弱いので羊飼いは昼も夜も見張っておかなければなりません。しかし羊からすれば羊飼いがいるだけで全ての必要は満たされ、安心できます。実は私たちも羊飼いであるイエス様とこのちの関係を持っているので霊的にも物質的にも満たされることができません。

2節には羊飼いの羊に対する責任が明確です。私たちが霊と心とからだの必要は何かのノルマを達成しなくて

も主が満たしてください。親が子どもを無償で育てるのと同じです。ですからイエス様が私たちの必要を満たして下さることについて何ら疑いをはさんではなりません。すべての人には一般恩寵として生まれながら生きる権利が与えられているのです。

3節で牧草と水に飽き足りた羊はいのちを吹き返します。そのようにみ言葉と聖霊によって再起動されるなら、(御名のゆえに) (主の責任によって) (義の道)、つまり神のみこころに導かれるということ。私たちは必ずしも主の計画した最善を選ぶとは限りません。それどころか次善三善、ときには最悪の選択をすることもあるでしょう。そのように道を外れた場合でも、イエス様は去る者は追わずではなく、一匹の羊を命に代えて連れ戻してください。これは贖いの道です。

二、主の守り

4節は私たちが恐ろしい体験をしているときの強力な励ましのみ言葉です。自分に何らかの危険が迫っているとき、恐れるのは人間として当然の反応です。恐れという感情は危険を知らせるシグナルだからです。これが機能しなかったら自分を危険にさらすことになるでしょう

う。ですから決して不信仰のしるしではありません。羊飼いは羊の矢面に立ちます。危険に向かって恐れを克服し、羊の群れを一匹たりとも失わないように守らなければならぬというプレッシャーにさらされるのです。このようなときに勇気を出せと自分言いきかせてもカラ元気しか出ないでしょう。けれども目には見えなくても主は共におられるという信仰こそ、勇気の源です。あなたがおわたと共におられる、と主に向かって告白するのは、極めて親密な関係であることを表しています。ここには原語においてインマヌエルに通じる言葉が使われています。不正が行われているとき、良いこと正しいこと筋の通ることを行うのは勇気がいります。ここは波風を立てないように黙っておこうという誘惑も働くでしょう。初めから恐れに降伏し、長いものに巻かれるなら勇気は要りません。しかし正しいことを貫こうとするとき、主は動き出して下さいます。またこのむちと杖は羊を痛めつけるものではなく、むちによって襲いかかる獣を撃退し、杖によって羊の群れを導くものです。ですから慰めとなるのです。

5節は不思議な光景です。いったいどこの誰が敵陣の

前で宴会を開くでしょうか。この場合のホストはイエス様、ゲストは私たちです。生死をかけた戦争をしようという極限状態にご馳走は喉を通らないはずで、それでも食事ができるのは主が敵に対してバリアを張っておられるからです。イエス様は人生の様々な敵が私たちを打ち負かすことを許しません。私たちに触れる者は主の瞳に触れることだからです。さらに宴会は進み、クライマックスは頭に香油を注いで下さいます。私たちが主に従おう、み言葉に従おうとするなら、主は聖霊に満たしてイエス様のにじみ出る生活を送らせてくださいます。生身の人間が普通の生活で聖霊に満たされるとは何と光栄なことでしょうか。神様が私たちを単なる人間扱いではなくイエス様扱いして下さいる証拠です。

結論

自分の確かさではなく主の確かさに立ちましょ。

研究資料

(小平徳行)

本篇は、牧者として、その民を導き守ってくださる主に對する感謝と信頼に満ちた詩である。スポルジヨンは「詩篇の真珠」と呼んだ。前半(1〜4節)は主を牧者にたとえ、後半(5〜6節)は客をもてなす主人にたとえている。

テキスト

1 主は私の羊飼い 神は羊飼いとして、その民イスラエルを守り導かれるお方である。このような告白はイスラエルの歴史の古くから見られる(創世記49・24、イザヤ40・11、エゼキエル34・11など)。また支配者や王も牧者と表現された(Ⅱサムエル5・2、7・7、エゼキエル34・2)。ここでは、神とその民一般との関係ではなく、「私の羊飼い」とあるように、神との個人的な関係が告白されている。神を牧者として表すことは、同時に自分を羊にたとえることを意味する。羊が弱く、自己防衛力を持たず、近視眼的で迷いやすい動物であるように、自分もそのような存在であり、羊飼いである神に全存在をゆだねていることを告白している。また羊は財産として飼

われているゆえ、所有者はこれを大事にする。神は羊飼いであると共に、所有者である。ダビデは自分が主のものであることを自覚して、信頼していた。乏しいことがありません 主は必要を満たしてください。この事はイスラエルの歴史において、特に荒野の40年間の旅路において体験された事実である(申命記2・7)。

2 緑の牧場 柔らかい草の生えている場所。伏させ安心して草を食べ、身を横たえることのできる安全な状態を意味する。いこいのみぎわ 疲れと渴きをいやす水が豊かにある所。牧草や水はいずれも羊の生命を支えるものであるが、パレスチナにおいて牧草と水は乏しく、優れた牧者によってのみ探し当てられる。か弱い羊の一切は牧者にかかっており、牧者なしには飢えと猛獣の危険に對する確かな守りを得ることはできない。

3 主は私のたましいを生き返らせ 弱っている魂に生命の活力を呼び戻すこと。特に、靈的な食物である神の言葉によって養われ、神との関係の回復や深化によって魂の平静が与えられること。御名のゆえに 救い主としての神のご性質にあずからせるため。聖なる神はご自身の民も聖であることを望まれる。義の道 誤りのない

道、または救いに至る道と解釈することもできる。「義」は両者の真つ直ぐな関係（最も近い関係）を表わす。

4 死の陰の谷 狭く険しく見通しのきかない場所。パレスチナには深い谷があり、猛獣がそこに住んで、しばしば羊を襲つたと伝えられている。**むち** 先に鉄の金具の付いたこん棒で、獅子や狼を追い払うために用いられた。**杖** 「よりかかる、支える」という動詞から派生した語で、曲つた柄のついた大きな杖のこと。山路を歩く時の支えや羊を数える時、さらには迷いやすい羊を懲らしめるために用いられた。**慰めです** 保護と導きだけでなく、懲らしめや訓練を慰めと捉えている。

5 私の敵をよそに…食卓を整え 遊牧民の生活において、逃亡者は天幕の主人の好意によって安全を確保される。主の守りは、敵の前で平然と食事ができるほど安全で確実である。アブサロムの追手を目前にしながら、バルジライにもてなされたダビデの体験は、このような主の守りの具体例である（Ⅱサムエル17・27～29）。**香油を注いでください** これは任職の儀式としての油注ぎではなく、喜びの象徴である（詩篇45・7、133・2）。主人が客人の頭に香油を注ぐことは、パレスチナでは客を

歓迎する時の習慣であった。私の杯は あふれています 豊かなもてなしを受けている様子であり、主のあふれる恩寵を歌っている。

6 私のいのちの日の限り 直訳すると「生涯のあらゆる日々」。順境の時も逆境の時も。いつくしみ「善」良「い事」の意。**恵み** 契約に基づく愛を意味する。追って来るでしょう 主に従う者には恵みが追って来るが、悪者には暗闇と滅びが追いかけてくる（詩篇35・6、140・11）。**私はいつまでも** **【主】の家に住みます** ダビデにとつて神との交わりの場である神の宮で過ごすことが最大の喜びであった（詩篇27・4、61・4）。「主の家」は現実の神殿の建物ではなく、神の名の置かれている場所、神がご自分を啓示される場所。イエスは万人が祭司として主の宮に住む事ができるように、私たちが自由に神との交わりにあずかれるようにしてください（ヘブル10・19～25）。ダビデは新約的な信仰を先取りしていたといえる。

参考図書 小林和夫「詩篇」『新聖書註解・旧約3』、鍋谷堯爾「詩篇を味わうⅠ」、C・H・スポルジョン「ダビデの宝庫」（以上いのちのことは社）、他。

聖書 ガラテヤ5・16～26

タイトル 聖霊の実

暗唱聖句 御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。

ガラテヤ5・22～23

目標 御霊の実を豊かに結ぶ者となる。

導入

(後藤 真)

今日はペンテコステ。聖霊降臨日、聖霊がくだった日です。十字架にかかり、よみがえられたイエス様は二つの約束をくださいました。一つはもういちど来られること。そしてもう一つはイエス様の代わりに聖霊を送ってくださいることです。弟子たちは、イエスが天に昇ってから十日間、心を合わせてお祈りをしました。

そして五旬節の日、約束どおり聖霊がくだります。おくびようだった弟子たちは勇気をもってイエス様を伝えるようになりました。それを聞いて悔い改め、弟子に加わる人たちが起こされ、教会が生まれたのです。

教会といっても礼拝堂があるわけではありません、何人かで家に集まり、教えを聞いたたり、お祈りしたり、食

事をしたりしていたのが、はじめのころの教会です。聖霊はわたしたちに、イエス様に従って生きる力、イエス様を証する力をくださいます。そして、聖霊はイエス様に従う人を結びつけ、教会を生み出します。

御霊によって歩みなさい

きょうの聖書は「御霊によって歩みなさい」ということばから始まっています。御霊とは聖霊のことです。御霊によって歩むとは、聖霊に導かれて生きるということです。

では聖霊に導かれるとはどういうことでしょうか。わたしたちがどうしたらいいのか何でも聖霊が教えてくれるということでしょうか。お祈りしていたら聖霊の声が聞こえてきて「朝ごはんはパンではなくご飯を食べなさい」とか「白いシャツを着なさい」というようなことを言われるわけではありません。聖霊の導きによって勉強しなくても試験の答えが分かったり、話したことの無い外国語がとつぜん話せるようになったりということもあります。

聖霊に導かれて歩むというのは、聖霊に助けられてイエス様の喜ぶことをして生活するということです。「い

つもそう思っているよ」という人もいるでしょう。でも、イエス様に喜ばれることをじゃまする敵がいるのです。それが「肉」です。

肉といっても焼肉にするおいしい肉のことではありません。肉というのは、心の中からわたしたちに働きかけて、自分の思い通り、わがままにさせるように導く力のことです。それで、わたしたちがイエス様を喜ばせたいと思っても、気づいたら嘘をついてしまったり、他の人を押しつけてしまったりしてしまうのです。聖霊はわたしたちを肉の力から自由にして、イエス様を喜ばせることができるように助けてくださるのです。

御霊の実

水をやり、肥料をやり、手入れをして、一生懸命育てた木にはたくさんの実がなります。いつも聖霊に助けていただいて、聖霊にたくさんお世話してもらった人は、御霊の実、聖霊の実を結びます。実を結ぶということとは、わたしたちが内側から変えられ、新しい人になってゆくということですよ。

今日読んだ聖書にはたくさんの御霊の実が出てきます。愛、喜び、平安。平安とはイエス様を愛し、イエス

様と親しく生きること。寛容、親切、善意は、相手のことを考える優しい人として生きること、誠実、柔和、自制とは、自分をいちばんにする思いを治め、イエス様に従って生きることです。

自分がいちばん、他の人より得たいと思うとき、心の中に「相手のことを考える人になりたい」という気持ちがあってもわいたらそれが聖霊の導きです。また、わがままばかりしてしまったり「これは良くないことだった。イエス様を悲しませてしまった」と思うのは聖霊の助けです。聖霊はそんなふうに何度もわたしたちの手入れをして、実を結ぶ人にしてくださるのです。

実は食べる人のために

御霊の実を結ぶのは、わたしたちが立派になり、他の人よりも偉くなるためではありません。へりくだって他の人に仕えるためです。りんごの木が自分でりんごの実を食べることはありません。実は食べる人のためのもの、他の人のためのものなのです。

実を結んだわたしたちの生活が、まわりの人たちを喜ばせ、イエス様を喜ばせるのです。

♪イエスは愛で満たす♪(新聖歌208)

聖書 ガラテヤ5・16～26 テーマ 聖霊の実

序論

(高橋頼男)

キリストの救いを受けた者が目指すべき目標は、救いの成長でありキリスト信仰の円熟です。「私たちはみな一人の成熟した大人となつて、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです」(エペソ4・13)とあるように、私たちがキリストの身丈にまで成長し、大人になることです。その実質は御霊の実を結び身につけることです。そして、それを可能にしてくださるのはご聖霊です。キリストのからだである教会の交わりと奉仕を通して、キリストにある者の人格に麗しい徳と品性の実を結ばせてくださるのはご聖霊のお働きによるのです。これらは「御霊の実」と言われています。私たちは律法や人間の修養や努力で、外から内を造ることによってこれらのものを身に付けることは出来ません。御霊は律法とは反対に、内から外に向かつてふさわしいかたちを生み出されます。命ある植物は自然に花を咲かせ実を結んでいきま

す。自分の弱さや罪深さを知らされる度に神の御前に出て悔い改め、一つ一つ決断をもってご聖霊に明け渡して委ね、御霊の導きに従い続けていくのです。そのような日々の歩みにおいて、私たちの内と生活の中に時が来れば麗しい実が結ばれていくのです(詩篇1・3)。異教と偶像の国である日本において、キリストの証人として伝道しようとするとき、キリストの信仰が私たちの人格や品性にまで及ぶのでなければ説得力のある働きを続けることが出来ません。人々は、キリストが神であることが分からなくても、その人が本物のキリスト信仰を持っているかどうかについては見抜く力を持っています。また、多くの場合日本人は人を通して神を見ます。そして、神につまずく前に人につまずいてしまうのです。人を見ずに神を見て下さいねということ自体がつまずきになりません。

ここには九つの「実」が出てきます。そして、それらは三つのグループに分けられます。

一、愛、喜び、平安(22)

これらは、神の前に私たちの内に結ばれる聖霊の実の現れです。神に愛されていることを知って神を愛し、神を喜び神に喜ばれるものとなり、神との平和が確立され

て平安に溢れ、私たちの生活に愛、喜び、平安（平和）の実が結ばれていきます。みことばと祈りを通して、聖霊による神との豊かな交わりに進みましましょう。

二、寛容、親切、善意（22）

これらは、人と人との関係の中で私たちの内に結ばれる御霊の實の現れです。罪深い人間にとって人間関係はなかなか厄介で面倒です。しかし、私たちはキリストの体の一肢体として召されていることを覚え、他の肢体との係わりの中に生きることが大切です。キリストにある人間関係、神の家族とされた人々は、私たちが選んだ好きな人、居心地の良い人、愛しやすい人ではありません。神が私に押し付けられた人たちです。彼らと積極的にかわりを持ち、交わり、共に奉仕に与りましましょう。そこで、彼らに教えられ励まされ、主にある忍耐を学び、赦される幸い赦すことの自由と解放を身につけていくのです。傷つけられた人が本当に癒されるのは、傷つけた人によつてです。キリストの共同体の中で聖霊により頼みつつ、キリストの愛を具現化、現実化させていただきましよう。

三、誠実、柔和、自制（22～23）

これらは、自分自身に結ばれてくる御霊の實の現れです。教えられやすく柔らかな服従に満ちたところこそ柔和です。終わりの時代は、自己中心で欲望追及の時代です。欲望にすぐ手が届く環境（インターネット等）がそこにあります。何につけても、セルフコントロールが決め手です。欲望にかられてしまふ自己を制する自制、節制、ブレーキの利く御霊の人の特徴を備えさせていただきましよう。

これら九つのものは単数の「実」と言う言葉でまとめられています。つまり、これらはただ一つの「御霊の實」なのです。これらの御霊の實の諸相は、どれもみなキリストのうちに見られるものです。そして、キリストが御霊に満ちて歩まれたように、私たちもまた御霊のご支配を受け、御霊に導かれて歩む中に御霊の實が結ばれていくのです。神の前に、人間関係の中で、自分自身との付き合いにおいて、御霊に導かれ、御霊によつて歩み、御霊によつて進みましましょう。

結論

聖霊の導きの中に生き、神との交わりの中で、御霊の實を結ぶ歩みをしていきましょう。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

16～17 御霊によって 佐竹明は、この個所を「霊の指揮下に」と訳している。「御霊」とは、「御子の霊」(4・6)である。「御霊によって」とは、御霊に支配された生活、自らを御霊の指揮下においた生活のことであり、御子の霊である聖霊に自らの全権をゆだねた生活、という意味であろう。また、**歩みなさい** とは、歩み続けるという継続の意味を持っている。**肉の欲望** 「肉」とは、単なる「肉欲」ではない。肉とは、神から離れた人間の自己中心性と、そこから生じる具体的行動の原動力である。このような自己中心から生じる欲望は、御霊による生き方と対立する。「御霊」と「肉」とは互いに逆らいあう行動原理なのである。

18 律法の下 ここでの「律法」は「モーセの律法」というよりも、人間を縛る法則性、掟の代表としての「律法」であり、そのようなものになんじがらめにされた人間の状態を意味する。人間は、「御霊に導かれる」時にのみ、この律法から解放され、自由にされることができ

のである。そしてこの自由は、キリストが私たちに与えてくださったものである(5・1)。

19 ここから21節までで、パウロは、肉の支配下で生じる生活の実際的な結果が列挙されている。このような個所は、他にはローマ1・29～31、Iコリント5・10～11等に述べられている。**淫らな行い、汚れ、好色** この3つの悪徳は、性的な罪のリストである。昔も今も、性生活の乱れは目を覆うばかりだったのであるうか。この3つの項目については、明確な線引きはなかなか難しい。

20～21 **偶像礼拝、魔術** この2つのリストは、異教的な罪についての指摘である。**敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ** 以上の8つのリストは道徳上の罪といふことができる。これらの罪は、共同体の成立を根底から破壊する罪である。特に、最後の**ねたみ** はこれらの罪の総括的な位置づけであつて、26節の結びの部分にも登場することから、パウロはガラテヤの諸教会の問題点を「ねたみ」に見ていることもうかがえる。また、これらの罪はすべて自己中心から由来する罪であることも特徴的なことである。**泥酔、遊興** この2つの罪は、不摂生の罪としてあげられる。以前にも言ったよ

うに 第2回目のガラテヤ訪問の時(使徒18・23)であると思われる。神の国を相続できません 神の国の相続人(3・29)であるキリスト者は、これまで述べられてきた肉の行いから決別していなければならぬ(24)。

22〜23 以上の悪徳リストに引き続き、「御霊の実」のリストが語られる。肉の働き(19)の「働き」が複数形であるのに対して、「御霊の実」の「実」は単数形で書かれている。聖霊は、ある人には愛を、また別の人には喜びを、という実を与えられるのではない。御霊の実は一つであり、そしてこれから語られる徳目は一つひとつ切り離されるのではない。愛 パウロがこの言葉を御霊の実の筆頭にあげたことに異議はない。Iコリント13章をはじめ、この書簡でも、人間に対するキリストの愛(2・20)、人間自身の愛(5・6)としても描かれている。喜び、平安 この2つは人間の感情的なものと受け止められやすいが、これらは聖霊によって与えられる賜物である。寛容 この語は「辛抱強さ・忍耐強さ」という感じを含んだ言葉である。誠実(ギリステイス) 人間の神に対する信仰という意味に訳される。しかし、この徳が人間に向くならば、それは「誠実・忠実」という意味に

なる。このようなものに反対する律法はない 御霊によって歩む者の行いである「御霊の実」は、律法が要求したものと結果的には合致する。

24 キリスト・イエスにつく者 キリストと共に死に、キリストと共によみがえらされた者を指す言葉であって(ローマ6・3〜11)、キリストがわたしに居り、わたしがキリストに居ると告白する者(ヨハネ15・4)である。十字架につけた ここで用いられている動詞は、過去の成就された行動を指し示す言葉であり、回心、もしくはバプテスマの時を指すものと見られる。

25〜26 私たちは、御霊によって生きているのなら わたしたちは御霊によって生きているのだから、という意味。御霊によって進む 「進む」とは、規則に従って、まっすぐに進む、という意味であり、御霊の原理に従ってまっすぐに行動する、ということを指す。「生きる」が御霊の原理を指す言葉であるのに対して、「進む」とは具体的な行動を指している。

参考図書 佐竹明「ガラテア人への手紙」(現代新約注解全書)、藤原藤男「ガラテヤ書の研究」(聖書の研究社)

聖書

詩篇119・105～112

タイトル

み言葉は光

暗唱聖句

あなたのみことばは 私の足のともしび

目標

／私の道の光です。
み言葉の光に導かれて歩む。

詩篇119・105

導入

(土屋開夫)

都会に住んでいると、夜でも外が結構、明るいですが、田舎のおじいちゃん、おばあちゃんの家に泊まりに行ったり、キャンプに行った時などは、夜の外は本当に暗いですね。懐中電灯で足元を照らさないと、怖くて歩けません。

聖書の時代は今よりもっと暗かったので、ともしびを灯すランプはとても大切でした。

真つ暗つて怖いですね。何も見えなくなると、とても不安になります。ですから先生は、いつもカバンの中に小さなライトを持ち歩いています。光を持っていれば、もし急に停電になっても安心ですからね。

人生の道は何で照らす？

そんなふうに暗い夜の道はライトやランプで照らせばいいですが、「人生の道」「生きる道」は何で照らせばいいのでしょうか？

そう言うと、「人生の道？ 生きていくのに『光』が必要なの？」と思うかも知れません。でも、まさにその通り、私たち人間が生きていくためには、人生を照らしてくれる「光」、ライト、ともしびが必要です！

「光」を持つていない人は、真つ暗闇の中を歩いていくようなもので、右に行けばいいのか、左に行けばいいのか、どっちに向かつて生きていけばいいのか分からず、人生の迷子になっている人がたくさんいます。

その証拠に、町を歩いていると、色んな所にたくさん「占い」のお店があるのに驚きます。「光」をもっていない人はどう生きればいいのか分からないので、ついつい占いに頼りたくなるのでしょうか。朝のテレビでも雑誌でも占いがあります。でも皆さん、占いは「人生の光」にはなりません。それどころか、占いには悪魔が働くので、絶対にやってはいけませんよ。

み言葉の光

では、何が「人生を照らす光」となるのでしょうか？それは勿論、聖書に記された「神様の言葉」です！天から世界の全てを見ておられ、特に愛する私たち一人一人をよく見守っておられる神様は、私たちが人生を生きる上で、どう歩んだらいいのか、み言葉で教え、導いて下さいます！

そのためには、私たちは聖書のみ言葉を一つでも多く読んで、覚えることが大切です！

皆さん、み言葉をどれくらい覚えていますか？一つでも覚えていたら、素晴らしいです！五つ覚えていたら、スゴイです！もし十個覚えていたら、超スゴイです！

一本のろうソクの火でも明るいですが、十本灯したらもっと明るいですからね！覚えているみ言葉をみんなで言ってみましょう。(個所は言えなくてもよしとする。)

教師の証し(例)

私は小学5年生の時にイエス様を信じて、洗礼を受け

ました。その時にもらったみ言葉は、マタイ28・20の「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」(口語訳)というイエス様の言葉でした。このたった一つのみ言葉によって、私は人生の道、生きる道を、どれほど明るく照らされてきたことでしょうか！

一人ぼっちで不安な時、色んなことが心配になる時、難しい問題にぶつかった時、「今もイエス様がボクと一緒にいてくださる！だから大丈夫だ！」と、本当に心強く支えられ、このみ言葉のおかげで今日まで生きて歩んで来られました！だから聖書のみ言葉は、本当に「私の足のともしび 私の道の光」なんですすよ！

(※CS教師が自分の証しを短くしてもよい。)

まとめ

子どもはみ言葉を覚える天才です。今のうちから、たくさん覚えて下さい。そしてみ言葉を信じることです！そうすれば人生の暗い道でも安心ですよ！

♪主がついてれば♪(PW12、イン10)

聖書 詩篇119・105～112 テーマ み言葉は光

序論

(小泉 創)

119篇は、「いろは歌」の形をとりながら、み言葉信仰をテーマとしている詩篇です。特に105節は、多くの人に愛されているみ言葉のひとつです。

一、道を照らすみ言葉

私たちの周りは光に満ちていて、本当のやみを感じる事が少なくなっています。道端にも自動販売機の光があり、街灯がともり、スマホの画面であたりを照らすこととしています。しかし私たちにとって必要な光は、物理的なものだけではありません。内面を照らす光こそが必要なのです。

この詩人は、神の言葉こそが、自分の足元、行くべき道を照らす光にほかならないと告白しています。

〈あなたのみことばは 私の足のともしび 私の道の光です〉。

心が重くふさがれて、やみに囲まれているように感じ

ることがあります。誰も自分の人生がこれからどうなっていくのか、知ることはできません。それは人間には隠されています。

しかし神のみ言葉は、どのようなときにも私たちの人生を照らししてくれる光であるというのです。今、自分がどこにいるのか、どこに行こうとしているのかを指し示してくれます。罪を犯したアダムに向かつて神が「あなたはどこにいるのか」(創世記3・9)と語り掛けられたように、私たちが深く探られることもあります。

二、悩みの中で

詩人をとりまく現実がどのようなものであったのか、具体的にはわかりませんが、困難な状況の中におかれているようです。〈ひどく苦しんで〉、〈いつもいのちがけ〉、〈悪者どもは…罍を設けました〉ということから、大変な戦いを経験していたことが想像できます。敵対する人々の存在が詩人を悩ませていたように、私たちにも逃げ場のない人間関係のストレスは特に強いのしかかつてきます。子どもたちであればなおのこと、世界が狭く、経験も少ないだけに、苦しむこともあるでしょう。

悩みの中にあつて、詩人は神の言葉、その教えを守ると告白しています。み言葉には深い慰めがあることを知っているからです。(定め)、(戒め)、(さとし)、(おきて)、これらの言葉はどれも「神の言葉、教え」をあらわしています。苦しみの中で、最大の危機は、神の教えから心が離れてしまうことです。詩人は神に向かつて、感謝、賛美、あかしをささげながら、力強く語られる神の言葉を待ち望んでいます。

三、み言葉をたくわえる幸い

詩人は、み言葉を(いつまでも)(終わりまでも)守ろうと力を注いでいます。神の教えを忘れず、守り、離れないことを心に定めています。それは神のもとから離れないという信仰です。詩人がいかに神を愛し、求めているか、その思いが伝わってきます。

危機の時にみ言葉を守るためには、普段の生活の中の積み重ねが必要です。毎日の一步一步の歩みを神に委ねていってこそ、いざという時にも神の手の中に安らぐことができます。

あなたも心に蓄えたみ言葉によって、力づけられたこ

とがおありでしょう。ふと心にみ言葉が語り掛けられ、はっとさせられたこともおありでしょう。み言葉を蓄えることは、私たちにも、子どもたちにも必要なことです。主のもとにいくときまで、私たちには日々、み言葉が必要です。

(私は あなたの おきてを 行うことに心を傾けます。いつまでも終わりまでも)。

この詩人のように、み言葉を実行することにもつとめましょう。みことばを通して、深い慰めが与えられます。大きな喜びが与えられます。

結論

どのようなやみの中においても、み言葉がわたしの道を照らしてくださると告白できることは幸いです。日々の歩みを一歩ずつ主に導いていただきましょう。

研究資料

(金井由嗣)

アルファベットのいろは唄

119篇は、ヘブル語のアルファベット22文字それぞれに同じ文字で始まる8行を振り分けた「いろは歌」の形式を取っている。主の教え(トローラー)を学んで覚えることを勧めるこの詩の内容と対応する形式といえる。工夫を凝らしてみ言葉の暗唱に努めた人々の熱意をこの詩から読み取っていきたい。

テキスト

105、107 **みことば**〔ヘ〕ダーバール。106で**〔義の〕定め**、108で**さばき**〔ミ〕シユパット(新共、共同は106で「正しい裁き」、108で「裁き」)、109で**みおしえ**〔ヘ〕トローラー(新共、共同は「律法」)、110で**戒め**〔ビ〕クデーーム(新共は「命令」、共同は「諭し」)、111で**さとし**〔エ〕エーデユート(新共、共同は「定め」)、112で**おきて**〔フ〕ッカー(新共、共同は「掟」)と様々な言葉に言い換えられているが、すべて同じ「神の言葉、教え」を指している。具体的には律法(トローラー)である。同じものを少しずつ違う言葉を重ねて言い表すことは旧約聖書の詩文、特に知恵文学のテキスト

にしばしば見られる技法であり、読み手に強い印象を与えると同時に、それらの言葉が指し示す内容の豊かな広がりや表現する効果がある(フォン・ラート)。それゆえ、個々の訳語の細かな意味の違いにこだわる必要はない。**私の足のともしび** **私の道の光** これも同じものを別の言葉で言い換える同義反復の並行法である。「足」と「道」、「ともしび」と「光」の違いを気にする必要は無い。み言葉は足元を照らす光である。サーチライトのように遠くまで見せるのではなく、目の前の一歩一歩をみことばの光に従って歩むことが大切なのである。

106 **あなたの義の定め** 新共、共同は「正しい裁き」。神の義に基づく正しい判定が律法には記されており、それが実生活で神の御心を求めるための範例となる。この詩の作者はそれを守ることを誓い **また 果たします** と言い切る。第三版までの新改訳と共同では完了形として訳しているが、その方が意味は通る。神の前に正しく生きることはそれ自身が報いである。

107 **私はひどく苦しんでいます** 正しく生きているにも関わらず不当な苦しみに遭うことがある。作者はそのような状況にあった。それで、**みことばのとおり私を生**

かしてください。と神に訴える。理不尽な苦しみの中でも作者は神への信仰を失わず、神がみことばの中で約束した通りに信仰者を生かしてくださることを求めるのである。

108 私の口から出る進んで献げるものを 共同は「私の口が進んで献げる賛美を」。「自発的な供え物」〔ネダーバーが作者の口から出て、神に献げられるのである。共同は賛美、新共は祈りと解釈する。祈りと解釈する場合も、これは嘆願ではなく感謝・賛美の祈りである。苦難を切り抜けてからではなく、苦難のただ中でお神を賛美する信仰がここにはある。そして作者はなお、神のさばきを学ぼうとする。不当な苦しみの中で人はしばしば自己義認・自己正当化の誘惑に駆られるが、人を義とするのはただ神のみである。

109〜110 私は いつもいのちがけです (109) 悪者どもは私に対して毘を設けました (110) ここも同義反復の並行法である。それでも (109) それでも私は (110) 作者は身の危険自体が危機なのではなく、それによって神の教えから心が離れることこそが真の危機であることを理解している。それゆえ、苦しみの中でも主の教え(トー

ラー)から離れないことを神に誓うのである。

111 私はあなたのさとしを永遠に受け継ぎました。これこそ私の心の喜びです。新共同訳は「あなたの定めはとこしえにわたしの嗣業です」。嗣業〔ナハラは本来、神によって割り当てられた土地を指す。作者が受けた不当な苦しみの中には、財産に対する侵害も含まれていたかもしれない。しかし神が心と与えて下さった生きた信仰の証しは、地上の財産にまさる、永遠に失われぬ「嗣業」であり心の喜びなのである。いつまでも、終わりまでも「終わり」〔エーケブの語源は「かかと」で、「いつまでも(永遠に)」〔レオーラームと結びついて「最後の最後まで」の意味になる。苦難にあっている間だけの「苦しい時の神頼み」ではない。苦難から救われるなら、という条件付きの御利益信仰でもない。この世にあって神の言葉を守り抜くことは時に命がけ (109) であるが、それでも主に従い抜くことの信仰の表明である (鍋谷)。

参考図書 鍋谷堯爾『詩篇を味わうⅢ』、石黒則年(新聖書講解シリーズ)、フォン・ラート『イスラエルの知恵』。

聖書 箴言1・7〜19

タイトル 主を恐れることは知識のはじめ

暗唱聖句 主を恐れることは知識の初め。

箴言1・7

目 標 主を正しくおそれることを土台として人生を築く。

導入

(後藤 真)

みなさんはどうすれば物知りになることができると思いますか？ 本を読んで勉強しますか。塾に行つて勉強しますか。いろいろなやり方があると思います。では、どうすれば神様の喜ぶことがわかる正しい心を持つことができるでしょうか。それが、今日のみ言葉にある「主を恐れる」ということです。

「恐れる」の語源「つらむがむ」

「主（神様）を恐れることは知識の初め」という聖書のことばを読むと、こんなふうに思う人がいるかもしれません。「神様に怒られないようにしないといけないなあ。神様の気にいるようにしないとこわいなあ。神様にこわがつて、びくびくして生きることが賢くなるために

は大切なのかなあ」。

でも、このことばはそういう意味ではありません。ここの「恐れる」とは「こわがる」ことではありません。「畏れ敬う」という意味です。神様はとても素晴らしい方だから敬う、神様の前にへりくだつて神様のことばに聞き従う。これが「主を恐れる」ということの意味です。「そうか、神様を敬つて神様のことばに聞き従うと、知識がついて勉強ができるようになるのか。よし、教会に來ているから成績が上がるぞ、やったー」という声が聞こえてきそうです。

でも、ちよつと待つてください。ここに出てくる「知識」というのは、学校で習う勉強のことではありません。神様の気持ち、神様の喜ぶことがわかるようになることです。神様を畏れ敬い、神様のことばを聞こうとする人は「神様の喜ぶことを知る知識」が与えられるのです。

神様をいちばんに

さて「神様を畏れ敬い、神様のことばを聞こう」と言うのと、「教会に行かなくちゃ」と思うかもしれません。もちろん教会に行つて礼拝したり賛美したりすることもとても大切です。でも、日曜日だけ、教会に來るとき

6月

6日 礼拝メッセージ例

だけ神様のことを思い出すではありません。恐れ敬うというのはふだんの生活の中で神様をいちばんにするということですよ。

きょうのことばの続きには「わが子よ、父の教訓に聞き従え。母の教えを捨ててはならない」と書かれています。この聖書のことばが書かれたころのイスラエルでは、お父さんもお母さんもみな神様を信じていました。そして、神様を敬うことを、毎日の生活の中で子どもたちに教え、訓練しました。

まずはお父さんお母さんに、「ふだんの生活の中で子どもたちのお手本になり、神様に従う生き方を教え、訓練してください」とお願いしたいです。でも、それが難しい人もいますね。心配いりません。そのときは、教会にいる大人をお手本にさせてもらいましょう。

悪い誘いに乗らない

自分では神様の喜ぶことがしたいなあ、聖書のことばを守りたいなあと思っても、じゃまが入ることがあります。それは、悪い誘い、誘惑です。「いっしょに人をだましてお金もうけしようよ」と誘ってくる人がいても、そういう人の仲間になってはいけない、ときょうの聖書

には書かれています。

わたしたちのまわりにも、悪い誘いはたくさんあります。「あの子を仲間はずれにしない?」「教会なんか行かなくていいよ」「それよりも遊びに行こうよ」。そんな誘いを友だちから受けることもあるかもしれません。また自分の心の中からそんな気持ちが湧き上がることもあるでしょう。

そんな声に負けて、神様の気持ちよりも自分の思いをいちばんにしたくなることが必ずあります。そんなときは、神様に助けていただきましょう。「われらをこころみにあわせず、悪より救いくださいませ。(わたしたちを誘惑にあわせないで悪から救い出してください)」という主の祈りを思い出しましょう。

神様はいつもわたしたちといっしょにいて助けて下さいます。わたしたちもいつも神様といっしょにいて、神様をいちばんにしたいですね。主をおそれる人がいちばん神様に助けてもらえる人なのです。

♪主はすばらしい♪(PW 29、ホ135、イン11)

聖書 箴言1・7～19 テーマ 主をおそれる

序論

(石田高保)

古来よりユダヤ人は、「きよくなりたければ詩篇を読め。賢くなりたければ箴言を読め」と言い慣わしてきたそうです。事実、〈浅はかな者を賢くし、若い者に知識と思慮を得させるためのもの〉と箴言の書かれた目的が明らかにされています(4)。

一、神様を意識する

この個所のテーマは、最も神のみこころになつた生き方は何か、ということですが、私たちは日常生活の中で、様々な選択を次々とこなしてゆかなければなりません。あるいは長い時間をかけてじっくり考えたうえで行動することもあるでしょう。いずれにせよ自分の考えだけで事を進めるなら間違いも起きやすいものです。どうしたらいまこころになつた正しい判断や行動をすることができるといふのでしょうか。

箴言の中心と言ってもよい聖句は、〈主を恐れることは知識の初め〉でしょう。主を恐れるとは神様に恐怖の

念を抱くというのではなく、神様を畏れ敬う、第一とする、その臨在を意識するということです。知識と言つてもこれは頭脳に関するものではなく、神様に関する知識のことで、私たちの霊の領域で受け取るものです。「この世は自分の知恵によつて神を知ることがありませんでした」(1コリント1:21)とあるように、神様の世界のこととは、聖霊によつてはじめて悟り得ます。裏返せばイエス様を受け入れた人はどのような年齢の人であっても、神様のことをみ言葉によつて徐々に知ることができるといふのです。そして知るだけではなく、それを自分に当てはめて実行すると、み言葉の意味が体験的に分かってくるのです。こうして神の国を獲得して行くのです。

このテーマに通じる新約聖書のみことばは、「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます」(マタイ6:33)ではないのでしょうか。主を恐れる、つまり神様を何ものよりも第一とすることが祝福の道であるといふことです。もう少し具体的に言うとなら自分の判断に頼るのではなく、事の大小にかかわらず神様に尋ねることです。もしみ言葉が浮かぶならそれを吟味して生活に適用します。

何らかの促しであるならば、それに従ってみましょう。「心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りに頼るな。あなたの行く道すべてにおいて、主を知れ。主があなたの進む道をまっすぐにされる」(箴言3・5、6)とあるとおりです。

二、誘惑に打ち勝つ

また、ここには神様の親心が明らかにされています。〈わが子よ、父の訓戒に聞き従え。母の教えを捨ててはならない〉、幼いころから導いてくれた親の教えは、完全ではないにしろ、私たちの人格を形成する上で最も影響があったはずです。特に主を畏れる親であるならば、聖書の価値観を背景にして子育てをしてくれたことでしょう。悪い子になるようにと願う親は一人もいません。むしろ大きくなるにしたがって増し加わる誘惑に負けないよう、愛すればこそ諭そうとするのが親でしょう。誤った道に迷い込んでほしくないと願うからです。10〜19節には、〈わが子よ…わが子よ〉と親が子どもにさとすように神様が語りかけています。この場合の〈父の訓戒、母の教え〉とは、父母を代理人とする神様の教えということです。たとえ私たちの思いや行いが不完全、不十分で

あっても、神様はそれだからといって私たちをわが子として愛することをやめたりはなさいません。一歩でも二歩でもキリストのかたちへと成長することを目を細めて願っておられます。

ここには人を陥れてお金儲けをしようという誘惑が描かれています。このとおりでなくても道に外れたことを誘って来る誘惑には誰も無関係ではいられないでしょう。しかしそのような誘惑は、「自分の魂にダメージを与え、神から引き離す」定めにあるので、断固としてこれを拒むべきです。そのような誘惑が迫るとき、内におられる聖霊がこれは危険だ、これは間違っているとセンサーを働かせてくださいますから、ただちにこれに従いましょう。また主の祈りに「私たちを試みにあわせないで、悪からお救いください」、つまり悪魔の誘惑からお守りくださいという強力な祈りが用意されています(マタイ6・13)。世の力をはるかに凌駕する祈りの力です。

結論

神のみこころに最もかなった生き方、それは〈主を恐れる〉、つまりいつも神様の臨在を意識し、みこころを尋ね求めることではないでしょうか。

研究資料

(辻林和己)

「箴言」という表題は1・1の「^(ハ)ミシユレ」^(ハ)という言葉に由来する。ここでは「ことわざ」とか「格言」という意味である。「ソロモンの箴言」とあるが、ソロモンの言葉だけでなく、他の賢者の言葉も含まれていると考えられる(30・1、31・1参照)。

2〜6節は、この書の目的が記されている。特にここでの「知恵」(^(ハ)ホクマー)は、宗教的、倫理的に賢く行動するための霊的理解力、洞察力を意味している。そしてそれは神から与えられるものである。ここに出て来る「知恵」、「訓戒」、「悟りのことば」(2)、「知識」、「思慮」(4)などの言葉は、多少の相違があっても、同じ意味内容が含まれている。「浅はかな者」(4)、「思慮のない者」(口語訳) (^(ハ)ペスイー) は若くて未経験な者という意味。後出の「愚か者」(7) は「知恵のある者」(5) の対語として用いられている。

テキスト

7 主を恐れることは知識の初め 箴言全体の中心主題

と言える言葉。主を「恐れる」(^(ハ)ヤレー)は、単に神に対する恐怖心を持つことではない。この言葉は、主権者である神の前にひれ伏して、畏れかしこむ人間の畏敬の念を示している。神を畏れをもって礼拝し、従うこと。箴言全体はこのことを伝えようとしている。知識 (^(ハ)ダアス) 単なる人間的知識ではなく、神についての知識である(2・6参照)。初め (^(ハ)レーシース) ここでは「出发点」を意味する。主を畏れることこそ、あらゆる人生の出发点であり基礎である。愚か者 ここでは、主を知ろうとしない者、主が与えて下さるものよりも自分の欲望に従った方が幸福になると思っている者のことである。

8 わが子よ 当時、自分の生徒に語りかける一般的な呼称であった。父の訓戒 母の教え ここで、父の場合には「訓戒」(「教訓」口語訳) (^(ハ)ムーサー) という厳しい訓練を表わす言葉を使っているのに対して、母の場合には「教え」(^(ハ)トラー)と述べ、言葉による教育を強調している。父と母が協力して子供の教育に当たるべきことを示し、生徒や子どもに両親の訓戒と教えに聞き従うようにと命じる。

9 頭に戴く麗しい花の冠、首にかける飾り。当時、冠も首飾りも男女が同じように一般に用いていた。冠や首飾りのように、両親からの訓戒や教えはそれを身につけ、実行する者を正しい道を歩み、輝く者にする。

10 19節は箴言全体の中の第一の具体的な教え。「罪人たち」(10)の誘惑に従ってはならないと警告する。

11 14節の罪人たちの言葉は、人を悪の道に誘い込もうとする彼らの内にある悪巧みと残忍さを示している。

10 罪人たち(「悪者」口語訳) ここでは律法を常習的に犯す者のこと。

11 一緒に来い。： 罪人たちはこう言って、周りの若者を仲間へ誘い込もうとする。当時のパレスチナ地方にも略奪を行う組織的暴力があったようである(士師5:6、ホセア4:2等参照)。

12 よみのように、：呑み込もう 被害者に対する悪行を象徴的に表現している。よみ(へ)シエール)は死者を葬る墓の穴をイメージしているのであろう。

次の15 19節は、右記のような悪の誘惑に対する警告の言葉である。

17 網を張るのは無駄なこと。すべて翼あるものの目の

前では「翼あるもの」(「鳥」口語訳)を「わが子」、あるいは親の教えを守る知恵のある者、「網を張る」は「悪の道に誘う」と解することができる。知恵のある者は罪人たちの悪巧みをよく知っているので、たとえ彼らが知恵のある者を誘惑しようとしてもその誘惑に陥らない、という意味になる。

18 彼らが待ち伏せしているのは自分の血を流すため、隠れ狙っているのは自らのたましい 罪人たちが他人を滅ぼすために待ち伏せして張る網は、結果として自分を滅ぼすものとなる。

19 不正な利得を貪る者の道はみな、このようなもの。それを得る者たちはたましいを取り去られる 「不正な利得を貪る者」は自分の貪欲に支配される「罪人たち」であり、「愚か者」である。罪人たちは知恵のある者を誘惑しようとしても、見透かされているので失敗し、結局は自分の命を失うことになる。

参考図書 山内六郎「箴言・伝道の書・雅歌」『信徒のための聖書講解―旧約13』(聖文舎)、山口昇「箴言」『新実用聖書注解』(いのちのことば社) 他

聖書

タイトル

暗唱聖句

Ⅱコリント2・12～17
キリストの香り

私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってくださいませ。

Ⅱコリント2・14

目標

キリストを知る知識の香りを放って生きる。

導入

(土屋開夫)

今日は「花の日」です。教会に入ったら、お花のいい香りがしたかも知れませんか。礼拝の後で、教会のご近所やご高齢の方の所に、お花やみことばカードを届ける教会もあるでしょう。もし、子ども達からきれいなお花をもらったなら、誰でも嬉しいと思います。

ところで「フラワーガール」って知ってますか？

そう、結婚式の際に、花嫁さんの前を歩いて花びらをまく女の子のことです。もしかして、やったことある？

男の子がする場合は「フラワーボーイ」と呼びます。

なんとイエス様は、私たちをその「フラワーガール」、「フラワーボーイ」のように用いてくださるというのです！

私たちはイエス様の香り？

今日のみ言葉を、少し前から読んでみましょう。

「神はいつでも、私たちがキリストによる凱旋の行列に加え、私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってくださいませ。」

神様は私たちが勝利のパレード（凱旋）に加えてくださって、私たちがイエス様の「いい香り」を周りの人に放つようにしてくださいませ、というのです。

分かりますか？ つまり私たちが、みんなが、イエス様の「いい香り」になるということです。そう言われても、まだピンと来ないかも知れませんか。イエス様の香りを放つって、どういうことでしょう？

ある主婦の救いのお証し

北九州のある所に一人の主婦（K子さん）がいました。この奥さんはいつも心に悩みを抱えていました。親子の関係や子育てのこと、他にも色々な事でいつも心に不安や孤独を抱えていました。

そんなある時、家の近くの教会から、牧師先生とその

奥さんがご挨拶にやって来られました。K子さんは心の中で「あらやだ。宗教なんて私は要らないわ。変な宗教かも知れないし…」と警戒していました。

ところが、その牧師さん夫婦の顔があまりにもニコニコしていたのと、それだけでなく、「何かこの人たちは、心に確かなもの、揺るがないものを持っているなあ」と感じました。そうして、K子さんは自分から教会に行くようになり、やがてイエス様を信じて救われ、クリスチャンになりました。

つまり、この牧師先生ご夫婦から、イエス様の「いい香り」がしたのです。心の中に、

- ① イエス様から与えられる「喜び」がありました。
- ② イエス様を信じる確かな「信仰」がありました。
- ③ イエス様の救いをこの人にも知って欲しいという

「愛」がありました。

牧師先生ご夫婦の心の中にあつた、「喜び」や「信仰」や「愛」が、イエス様のことを知らせる「いい香り」となったのです。

(もう少年少女じゃないけれど) イエス様の「フラワー

ボーイ」「フラワーガール」として用いられたのです。

まとめ

この牧師先生ご夫婦だけではありませんよ。子どもみんなもまさにイエス様の「いい香り」として用いられます！ あなたの心の中に「イエス様を信じて救われた喜び」「イエス様にいつも愛されている喜び」「そして「みんなにもこのイエス様の平安を分けてあげたい」、そんな優しい愛の心があれば、あなたの心から自然にイエス様の「いい香り」が必ず放たれます。

そうです、心の香りはちゃんと伝わるものなのです。心の中にイエス様という「花」を持っているなら。

♪よろこびひろげよう♪ (PW26、イン74)

聖書 IIコリント2・12～17 テーマ キリストの香り

序論

(石田高保)

宣教にはいつも困難が伴うが、それを乗り越えたとき必ず実が結ばれることをパウロは体験していました。ですからコリントの同労者に対して、決して諦め^{あきら}めないようにと励ましています。

一、福音宣教の影響力

〈神はいつでも、私たちをキリストによる凱旋の行列に加え〉、パウロを始め福音宣教の同労者はキリストを凱旋將軍とし、自分をその方に従軍しているキリストの兵士になぞらえています。また宣教の戦いにおいて勝利し、凱旋行列の榮譽にあずかっている者にたとえています。実際、ローマ軍の凱旋行進ではローマの神々への感謝をあらわす香料がたかれ、沿道はその香りで満ちたとあります。それを宣教の勝利にたとえて〈私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放つて下さいませ〉と言っているわけです。

誰^{だれ}が香りを放つて下さるのかというと、それは神様で

す。私たちが香るものではありません。それはキリストがどんな素晴らしいお方であるかを分からせる香りです。それは必ずしも直接福音を言葉で伝えることだけではなく、何らかの愛のわざを行うことにもよるのです。人は愛されること、つまり大切に扱われることによって心を開きます。じっくり話を聞いてもらった、苦しいときタイムリーに助けてもらった、孤独なときそばにいてくれた、など。私たちが主により頼みながら、愛の行為に一步踏み出すとき、愛された人は普通の人間関係にはなく、この世にもないものをそこに嗅ぎ取るのです。〈私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神に献げられた芳しいキリストの香りなのです〉、キリストのことを少しでも証しするとき、相手の人に対して影響力を持つということではないでしょうか。

ただしキリストの香りは結果的に人を二分します。〈滅びる人々にとっては、死から出て死に至らせる香りであり〉、凱旋行列の香りもかく人によって意味が全く変わるといいます。ローマ軍に降伏した捕虜にとつて、沿道の香りは、奴隷にされる運命をいやでも意識させたことでしょう。

いっぽう救われる人々にとつては、へいのちから出ていのちに至らせる香りです。凱旋將軍と兵士たちにとつて、沿道の香りは勝利に榮譽を増し加えるものでした。救われる者にとつてキリストの香りはますます永遠の命を望ませます。「おおよそ、持っている人は与えられてもっと豊かになり」(マタイ13・12)とあるとおりです。さてキリストの香りは、どのようなクリスチャンが放つのでしょうか？ あるいは特別な人ですか？

二、福音宣教の心がまえ

〈このような務めにふさわしい人は、いったいだれでしようか〉。福音を拒むことによって滅びに至ったり、受け入れることによって命に至ったりすることになるという務めは、畏れ多いものです。結果については語る人にすべての責任があるわけではありませんが、神に用いられやすいよう自分を整える責任があります。

では福音を語る場合の心構えはどんなものなのでしょう。か。〈誠実な者として、また神から遣わされた者として、神の御前でキリストにあつて語る〉とあります。つまり、神が自分を遣わしたのだから神が語る力を与えてくださるのだ、という信仰を持つことです。相手にふさ

わしい内容を神がその場で語らせて下さるといふ信頼があると、力まないで済みます。また神の御前で語るとありますから、相手の話を受けとめながら主に尋ねつつ語るといふことです。教科書的な伝道フレーズを並べるだけでは相手の心に届かないでしょう。一方通行ではなく、双方向の会話により、相手との信頼関係をおして福音はより力強く届くのではないのでしょうか。

キリストの香りとは、つまるところキリストにある品性であるとともに、福音宣教するときに醸し出される影響力といたうことができるでしょう。私たちが自分に自信がなくてもだいじょうぶです。未熟であっても、経験が少なくても、伝えようとする人をおして主は著しく働いてくださいます。自分を整えてから伝えるのではなく、伝えつつ自分を整えるという同時進行でよいのです。自分は福音を語るにふさわしくないなどと卑下する必要はない。私たちが香ばしいのではなく、私たちの内におられるキリストが香ばしいのです。

結論

自分をおして神様が福音を語らせてくださるといふ信仰をもって、身近な人に福音を語ってゆきましょう。

研究資料

(小平徳行)

ここにはパウロの任務の性質と神がいかにして、困難の中にもかかわらず、彼の宣教の働きを支え、祝福して下さっているかが語られている。これは本書簡の全体に流れている主要テーマである。

テキストト

12〜13 トロアス エペソの北方にある町。「トロアス」とは「トロイの近く」という意味である。アレクサンドロス大王が自分の名に因んで「アレクサンドレイア」と付けた町はいくつかあり、それらを区別するために、この町は「トロイの近くの」という修飾語が付けられた。それを通称「トロアス」と呼んだ。パウロの時代において重要な港町であり、商業の中心地であった。門を開いて これは伝道の門戸が開かれたことを意味している。エペソ伝道の時にもこのような表現が使われ(1コリント16・9)、エペソに教会が生み出されただけでなく、コロサイやラオディキアなど、その地域の他の都市にも福音がもたらされることになった。トロアスもそのような可能性を秘めた伝道地であったかもしれない。兄弟テト

スに会えなかったので、心に安らぎがありませんでしたここでパウロはコリントに遣わしていたテトスに会うことを期待していたが、それができずにコリント教会の事を思って心配していたのである。それゆえ、有望な伝道地であったトロアスを後にしてマケドニアに渡り、テトスと会うことができた。その時、教会の状況を聞いてパウロは安心したのである(7・5〜16)。いかにパウロがコリント教会のことを親身になって心配していたかがわかる。

14 神に感謝します ここまで幾分重苦しい記述が続いたが、ここからは、感謝にあふれて、神がいかなる時にも、あらゆる場所で、パウロが効果的な働きをすることができるようになって下さったことが語られている。キリストによる凱旋びげんの行列に加え これは古代ローマにおける戦争の勝利の後に行なわれた凱旋行列(勝利の行進)を念頭に置いている。凱旋將軍と兵士がローマに帰ってくる際、敵のおびただしき戦利品や、鎖につながれた捕虜たちがその後が続いていた。ちょうどこれと同じように、いかなる困難の中にあっても、神はパウロと彼の同労者たちを、凱旋行列における勝利した兵士として導い

てくださるのである。ここはパウロが自分自身や同労者（キリストの恩寵に捕えられた）捕虜という立場に置いていると解釈する学者もある。それ自体はとも大切な視点であるが、文脈から考えると不自然ではないかと思われる。大切なことは、いかなる困難にもかかわらず、キリストにあって勝利者であるということである。私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってくださいます。凱旋行列の道の所々には、神々にささげる香がたかれて、よい香りが天に立ち上ったように、パウロが福音を真心をこめて、キリストにあって語る時（17）、キリストを知る知識の香りが広がっている。キリストを知ることが救いのための中心的な事柄である。

15～16 救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも凱旋行列における香は、勝利した將軍や兵士たち、そして彼らを歓迎する観衆にとつては喜びを連想させる香りとなり、捕虜とされた者にとつては、彼らを待ち受けている奴隷や死を連想させるものとなる。同様に、福音が語られる時、人々はそれを受け入れて救われるか、受け入れないで滅びに至るかの二通りの応答に分かれる。こ

のような務めにふさわしい人は、いったいだれでしょうか。この務めは人々に非常に厳粛な結果をもたらすゆえに、パウロであつても、自分がこの務めに不資格だと叫ばずにはおれない。しかし、神が選ばれ、必要な力を与えて下さるがゆえに適格な者として、この務めを果たすことができるのである（3・5）。旧約時代のモーセももちろんである（出エジプト3・10～14）。

17 神のことはに混ぜ物をして売ったりせず 「混ぜ物をして売る」とは「行商する」が原意。当時の商人がその場限りの不誠実な商売をしたことを背景としていた。当時、このような人々が大勢コリント教会に潜入していた。彼らはパウロの語ったことを否定し、ユダヤ教的、異教的教えを混ぜていたのである。神のことはである福音には何物も付け加えてはならないし、差し引いてもならない。

参考図書 山中雄一郎「コリント人への手紙」『実用聖書注解』、尾山令仁「コリント人への手紙第二」『新聖書注解』（以上のものは社）『The IVP Bible Background Commentary: NT, Colin G. Kruse, 2 Corinthians (The Tyndale New Testament Commentaries)』など

聖書

マタイ7・7〜12

タイトル

天の父への祈り

暗唱聖句

天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか。

マタイ7・11

目標

神は、祈りに答えて良いものをくださる天の父であることを知る。

導入

(和田牧子)

みなさんには何か「こうなったらいいな」という願いはありますか？ お誕生日にポケモンのおもちゃがほしいなとか、プリキユアのお人形がほしいなとか…。大きくなったら、サッカーの選手になりたいなとか、お花屋さんになりたいなとか…。まずはその願いを神様にお祈りしてみましよう。神様はみなさんがお祈りしてくれるのをとっても楽しみに待っていますよ。

お祈りとは？

お祈りとは神様とお話することです。神様が私たちに何をお話しになっているかを、まず「お聴きすること」

でもあります。神様は私たちに何て語りかけてくださっているでしょうか？ 「私はあなたのことがとっても大切です。最高級の宝物のように、いつもあなたのことを想っています」と語りかけてくださっていますよ。そのお声に耳を澄ませること…それがお祈りなのです。

その神様の愛でいっぱいの語りかけにみなさんは何とお返事しますか？ それはみなさんそれぞれ違うかもしれませんが。「はい！ 私もいつも神様のことを想っています。神様のことが大好きです。神様ありがとうございます！」とお祈りする人もいますよ。「うーん。神様ってほんとうにいるのかな？ いるならもつとわかるように教えてください」とお祈りする人もいるかもしれません。神様はどんなお祈りも喜んでくださっています。

求める相手はどんな方？

今日の聖書箇所には「求めなさい。そうすれば与えられます。探さなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます」と書かれています。なんとうれしい言葉でしょう。私たちは、私たちを愛してくださっている神様に何でも祈り求めて良いのですね。

しかし、しかし!! ここで大切なことは、何を求める

かというよりも、だれに求めるか…。私たちが祈り求める相手、神様がどんなお方であるかを、まずは知ってほしいと思います。天のお父さまである神様が、どれほど本気の愛でみなさんのことを愛してくださっているかを知ってほしいのです。

神様はみなさんといっしょにいたいといつも願ってくださっています。そう、神様の願い、神様の求めておられることは、みなさんといっしょにいることなのです。でも私たち人間は、しばしば神様のことを忘れて、ちがう方向に進んでしまいます。「神様なんていない」、「神様なんて知らない」と背中を向けてしまう私たちです。そんな私たちを「そっちじゃないよ」と追いかけて追いかけて、神様はついにひとり子であるイエス様をこの世界にお送りくださったほどでした。イエス様こそが私たちに与えられた最高のおくりものなのです。

良いものは。

今日のみ言葉は「天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか」です。最初に、「まずはみなさんの願いを何でもお祈りしてみてください」と言いました。

でも実際はそのとおりにならないこともあります。「○中学に絶対受かりますように」とお祈りしていても、残念ながら不合格ということがあるのです。がっかりするときも、たしかに人生ではあるのです。でもだいじょうぶ！ たとえ私たちが失敗したな〜と思うときでも、何でこんな悲しいことがおこるのかな？と思う時でも、それを良いことのように変えて、もつとすばらしい道を用意してください。お父さま…それが神様なのです。

そもそも神様は私たちが願う前から、このからだを与え、いのちを与えてくださったお方です。人間のからだ、ほんとうにすばらしく出来ているな〜と思いませんか？ おいしいごはんやパン、お水や空気までも神様は造ってくださいました。私たちがちゃんと生きていけるようにご用意くださったのです。温かいおうちや家族も、神様が与えてくださいました。

結び

本気の愛で愛してください。神様のことを忘れないうで、この頼もしい天のお父さまについていくこと、それがともうれしく、何より安心な人生なのです！

♪神さまといつもいっしょ♪ (イン73)

聖書 マタイ7・7〜12 テーマ 天の父への祈り

序論

(福井文彦)

私たちは神の子とされ、神の子の霊を与えられ、「天のお父さま」と言って祈ることが出来る者にされたのです。そのために大切なことは、本当に必要であるとの告白を与えてくださるのは天の父なる神であるという信仰の確信です。

一、祈り求めよ

イエスは祈り求めなさいと言われました。しかも〈求め〉るといふことばを一度や二度でなく、五度も繰り返し、祈り求めることの大切さを教えられました。そして、その祈りが聞かれるために〈求めなさい〉〈探しなさい〉〈たたきなさい〉と。そうすれば、〈与えられます〉、〈見出します〉、〈開かれます〉と約束されたのです。すなわち、三重の異なった動詞をもって、祈りが答えられる確かさ示し、疑いを持つことなく祈り求めなさいと教えられたのです。多くの人々は祈っても、それが本当に聞かれるという信仰の確信を持っていないのではないか

と思います。それは天の父なる神が答えてくださるとの信仰を持っていないからです。

しかし、人は誰でも銀行で金銭の取引が、郵便局では郵便物の手続きが、食料品店で食物を求めることができると納得することができます。そのように祈りというのが、神に聞かれ、応えられるとの信仰の確信を持っている人は、誰からも強制されなくても祈るものです。

二、求め続けよ

イエスは、落胆しないで、目的を果すまで祈り続けなさいと三つの動詞で教えておられます(7)。すなわち、〈求めなさい〉〈探しなさい〉〈たたきなさい〉です。この〈求めなさい〉〈探しなさい〉〈たたきなさい〉ということばは、原文では、「求め続けなさい」、「探し続けなさい」、「門をたたき続けなさい」という意味があります。ですから、〈求め〉ても与えられないからといって、あきらめてはいけません。もし、〈求め〉ても与えられないとするなら、もつと自分から積極的に〈探し〉してみなさい。それでも見出せなかつたら、放っておかず血が出るまで門を〈たたき〉続けなさいということなのです。

そのことはイエスご自身の祈りの生活の中にも見られ

ます。主は早朝、人を避けて祈られ（マルコ1・35）、徹夜で祈られました（ルカ6・12）。特に、十字架の前夜のゲツセマネの祈りでは、血のしたたりのような汗を流して祈られたのです（ルカ22・44）。その祈りは非常に激しいものであったとヘブル人への手紙に記されています（5・7）。イエスはこのようなご自分の体験を通して、祈りが神に聞かれるためには、「求め続けよ、探し続けよ、門をたたき続けよ」と、あきらめずに熱心に求めて祈ることを教えられたのです。

三、祈りに答えてくださる天の父

イエスはここでは、祈りに答えてくださる神を、地上における子どもと父親にたとえておられます（9〜11）。私たちがイエスの御名をもって祈るとき、私たちと神との関係は奴隷と主人、富める者と貧しい者のような関係ではありません。父と子との関係であり、しかもこの世の親子関係以上の関係なのです。

自分の子どもがパンを求めたときに石を、魚を求めるときに蛇を与える父親はいないでしょう。〈あなたがたは悪い者であっても〉とは、心が墮落して弱さと悪を持ち合わせている者であっても、の意味です。それでも〈自

分の子どもたちには良いものを与えることを知っている〉のです。それは父親の愛のゆえです。ましてや天の父なる神は愛の源であり本体であり、善にして人の心を深く洞察できるお方です。ですから、肉親の父親以上に〈求める者たちに、良いものを〉くださるお方なのです。

神は良いものだけをお与えになるお方であり、神がお与えになるものは、いつも決まって最善のものです。だから私たちが大きな願望をもって神のもとに行き、必要としているものを求め、しかも不動の信仰をもって、神が良いものを与えてくださるようにと願うことができるのです。神は私たちをこの上なく愛しておられるので、正しく歩む者に有用有益なものをくださるのです。神は、私たちに最善なものが何であるかを「存じますから、その最善のものを与えてくださいます」。

結論

人間の親子関係でも、子どもは屈託なくどんな心配事でも父親のもとに持って行きます。そのように、私たちも天の父なる神に熱心に祈り求めましょう。神が祈りに答えて良きものを与えてくださることを信じて祈り求めましょう。

研究資料

(中島啓一)

求めよ、探せ、(門を) たたけという三重の命令は、父なる神に対し揺るぎない信仰を持って祈るようという招きである。親の愛は地上における大きな愛の代表と言えるが、天の父はそれすらも比較にならないほど真実な愛を注いでくださるお方である。「人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい」との黄金律は、その神からの真実の愛を受けているという大前提があつてこそ、意味を持つものなのである。

テキスト

7 求めなさい…探しなさい…たたきなさい… 三つの命令はすべて現在形で、「〜続けよ」と動作の継続が命じられている(ルカ11・8、18・3参照)。並行箇所であるルカ11章では、この命令の前に、長旅で疲れた友人のために隣人にパンを求める人のたとえが語られている。求め、探し、たたくという三つの動作に段階を見いだす解釈もあるが、外してはならない中心的なポイントは、「とにかく熱心に祈り求めよ」ということであろう。「あなたがたがわたしを捜し求めるとき、心を尽くしてわたし

を求めらるなら、わたしを見つかる」(エレミヤ29・13)との約束でも、「心を尽くして」求めることが条件とされている。そうすれば与えられます…見出します…開かれます これらは「神的受動態」と呼ばれ、与え主は言うまでもなく神ご自身である。

8 だれでも、求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます 21・22の「信じて祈り求めるものは何でも受けることになれます」との約束と比較するときに、そちらの約束が「もし、あなたがたが信じて疑わないなら」(21・21)と条件付きであるのに対し、こちらは「だれでも、求める者は」と無条件であることは注目すべきである。逆に、祈りの答(与えられるもの)の具本性について見ると、21章では、山が海の中に移るといような奇跡さえも含む「祈り求めるものは何でも」(21・22)であるのに対し、この7章では、与えられ、見出し、開かれる、との三つの動詞には具体的な目的語が示されていない。このことは、この箇所での強調点が、与えられる「良いもの」(11) 自体にはなく、ご自身の民の必要を満たしてくださる「神の真実さ」に置かれているということを示すと考えてよいだろう。

9～10 パンや魚はガリラヤ地方の日常の食物である。パンを求めているのに石を 丸い石はパンに形が似ている。魚を求めているのに、蛇を 蛇はガリラヤ湖に生息する鰻うなぎ(律法によって食用を禁じられていた)の一種かもしれない。そんなものを子に与える親はいない。親は真実な愛をもって子の必要に応えようとするのである。

11 **あなたがたは悪い者であつても：** 特別に悪い人ということではない。天の父の真実と比べたとき、すべての人は、たとえ親切な親であつても、罪深いのである。それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は下等なものに見いだしうる法則が、高等なものにさらなる蓋然性がいぜんせいをもつて当てはまるという、ユダヤの一般的な論法。良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか 「良いもの」は6・31～33にあるような日常生活の必要を除外するものではないが、第一義的には、神の国の祝福という終末的な意味合いを持つものと言えよう。ルカははっきり「聖霊」(11・13)と記している。

12 **ですから** ここまで語られてきたことを大前提として、黄金律が語られている点が非常に重要。人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人に

しなさい この黄金律は消極的な形式(～するな)ではすでに知られていた。例えば紀元前後のユダヤ教師ヒレルは「あなたが憎むことを、あなたの仲間に行うな。これが律法の全体であり、その他のものはその注釈である」と教えた。しかしイエスが教えた積極的な形式(～しなさい)には、大きな意味の変化がある。キリストはまさに、積極的・自己犠牲的な愛によって律法を成就されたお方である。それゆえキリスト者の生き方も、常識的、律法的な地平から、律法の成就としての愛の地平へと飛翔するべきなのである。これが**律法と預言者**です。これとは別に、もう一つイエスが律法の要約として示したのが、「あなたの隣人となりびとを自分自身のように愛しなさい」(マタイ22・39)である(レビ19・18参照)。この7章の黄金律はそれと別物ではなく、少しニュアンスの違った解釈であると理解して良いだろう。自分のして欲しいことを他人にもすることこそが、隣人愛に他ならないのである。そしてそれは、神から真実の愛をもって愛されているのだという実感があつて初めて、人に与えうる愛なのである。

参考文献 4月4日分と同じ。

聖書 ヨブ1・1〜22

タイトル ヨブの苦しみ

暗唱聖句 主は与え、主は取られる。／主の御名は

目 標 ほむべきかな。 ヨブ1・21

試験の中でも主の深いみ心を思い、慈愛を信じて祈る者となる。

導入

(和田牧子)

みなさんは「あゝ何だかつらいな」「悲しいな」と思うことがありますか？ おうちでお父さんにおこられたり、学校でおともだちとけんかしたり、毎日うれいこともあるけど、悲しいこと、つらいこと、くやしいことともたくさんあることでしょうか。今日はとても苦しいこととの連続だったヨブという人のお話です。

サタンのいんごみ

ウツという地に、ヨブという人が住んでいました。とつてもやさしく、まっすぐな心、まっすぐな信仰をもつた人でした。家族は奥さんと、7人の男の子、3人の女の子がいました。その他にも何百、何千という羊やらくだや牛、ろばなどがおり、多くの召しつかいがいました。

とてもお金持ちで、その地方でも有名な評判の良い人だったのです。

ある日神様はサタンに言われました。「おまえは、わたしのしもべヨブを知っているか？ ヨブほどまっすぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている人は、この地上に一人もいません」。サタンは答えました。「ヨブは何の理由もなく神さまを信じ、恐れているのでしょうか。あなたが彼を祝福し、たくさんのお金を与えているから、神様を信じているだけではないでしょうか？ ヨブのすべての財産をうばってみてください。彼はきつと、面と向かってあなたをのろうでしょう」。神様は答えられました。「では、ヨブの財産をすべておまえの手にまかせましょう。ただしヨブ自身には手をおぼしてはいけませんよ」。さあ、大変です！ サタンはどんなことをしでかすのでしょうか？

ヨブの苦しみ

ある日、ヨブの息子や娘が飲んだり食べたりしていたときのことです。ヨブのところへ一人の人がやってきて言いました。「大変です！ シェバ人におそわれました。あなたの牛やろばたちがうばわれ、若者たちが焼きほろ

ほされてしまいました!」「え。何だって!?」ヨブさんはとつてもびっくりしたことでしよう。ところがところが…さらにもう一人、続いてもう一人とやってきて、次々と動物たちや若者たちが殺されてしまったと知らされました。何ということでしょう! そしてついにこんな知らせが…。「ヨブさん、大変です! あなたの息子さんと娘さんが食事をしていました。すると強い風が吹いてきて、家がおれてしまい、みなさん亡くなられました!!」こんな知らせがやってきたら、「ガガガン」と、シヨックでおれてしまいそうですね。

このとき、ヨブがとつた行動はこうでした。ヨブは立ち上がって着ていた上着をひきさき、頭をそりました。そして地の上にひれふして神様を礼拝したのです。そしてこう言ったのです。「わたしは裸で母のおなかから生まれてきました。ですから、裸でかの地に帰りましょう。主は与え、主は取られます。主のお名前をほめたたえます!」。

ヨブの信仰

ヨブはどんな気持ちでこんなことをし、こんなことを言ったのでしょうか。ヨブは悲しくて悲しくてしかたがな

かったのです。「神様どうして? どうして私の大切な子どもたちを?」となげき悲しみました。もしかしたら怒りも爆発していたかもしれませぬ。上着をひきさいたり、頭をそつたのはその証拠です。

しかしこのとき、ヨブはそんな中でも、神様を礼拝しました。「神様が与えてくださり、神様が取られたのですね」と、神様をほめたたえたのでした。ヨブはあくまでも人生の主人公はヨブ自身ではなく、神様であると信じていたのです。

結び

私たちの人生にも、つらいことや苦しいことが起こってくるかもしれませぬ。「ヨブのように、神様を礼拝したり賛美したりなんてできないよ」と思うかもしれませぬ。でもだいじょうぶ。思いっきり神様に悲しみやなげきをおつけてみましょう。神様のことを見失ってもだいじょうぶ。神様のほうでは決してみなさんのことを見捨てたり、見はなしたりはなさいませぬ。かならずそこからまた立ち上がる道をご用意くださっています。かならず神様からのなぐさめと助けが用意されていますよ!

♪ 気持ちが暗くなったら♪ (イン78)

聖書 ヨブ1・1～22 テーマ ヨブ

序論

(高橋頼男)

ヨブ記は旧約の中でも異彩を放っています。ヨブという義人の受けた苦難について記され、全編、友人たちとの論争やヨブの独白が長々と続きます(3章～42章)。それらを通し、義人がなぜ苦難を受けるのかという人生の不可解、最大の疑問・難問が取り扱われているのです。1章～2章は、この命題にかかわる問題の提起です。ヨブは神を畏れる正しい人でしたが、サタンの挑戦により、神が許された試練に会い、愛する家族、全財産を一瞬にして奪われてしまいます。しかし、ヨブは、「主は与え、主は取られる。／主の御名はほむべきかな」と告白し、神の前にそのくちびるで罪を犯しませんでした。

一、神が許される義人の苦難(1・1～2・13)

義人ヨブの経験した苦難はとても理解しがたいものです。なぜ、神の前に正しく生きる者に理不尽きわまりないことが次々起こってくるのか。義なる神はなぜそれらをお許しになるのか。しかも、神は沈黙されその理由を

お示しになりません。せめて、苦難の意味を少しでも知らされたなら、神を信じて耐えることも出来るかもしれません。しかし、わけの分からない苦難の連続は、まことに耐え難いのです。「主よ、いつまでですか。／あなたを永久にお忘れになるのですか。：いつまで私は自分のたましいのうちで／思い悩まなければならぬのでしょうか」(詩篇13・1～2)。悪者は滅び、正しく歩む者は祝福を受けるといふ、旧約聖書の価値観や人生観を超えた課題が提示されているのです。

二、神の主権(1・21)

次々と襲う苦難に耐えながら、ヨブ自身が答えを出したのには、自分の人生の一切の出来事に「神の主権」を認めることでした。「主は与え、主は取られる。／主の御名はほむべきかな」。人生の主人公は「私」ではなく「主」です。人の生き死にを含め、人生の決定的な場面で人間はあくまでも受け身なのです。そのように告白するヨブの信仰はまことに驚くべきものです。目の前で次々に起こった悲惨で悲痛な出来事のただ中に神を認め、ひたすら生ける主を崇めているのです。ヨブの経験した試練を改めて考えて見るなら、ヨブの告白は人間中心の信仰で

はとても推し量れません。ヨブの妻のように「あなたは、これでもなお、自分の誠実さを堅く保とうとしているのですか。神を呪って死になさい」と、とてもじゃないが、もうついていけないという人間の本心が出てしまいません。あくまで神を聖とし、神の主権にひれ伏す神中心の信仰と、神を認めると言いながら、いつも人間の思いを優先し、条件を付ける人間中心の信仰との違いが明らかです。

三、神の慈愛とあわれみ（42・10～17）

「あなたがたはヨブの忍耐のことを聞き、主によるその結末を知っています。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられます」（ヤコブ5・11）。神があえて許されることには、神の計り知れないみ心があり、神の真実と神の慈愛、あわれみがあることを受け止める信仰が与えられますように。

神を畏れて懸命に生きてきた姉妹が、愛するわが子を二度までも失うという、まことに辛く耐え難い悲嘆のどん底を経験しました。その様子を黙って見ていたご主人が、やさしく語ったのは「神のくださった味噌汁は飲むべきだよ」という勧めでした。神の備えられる味噌汁は、

時々辛くてしょっぱくてとても飲みにくいのです。しかし、神がくださったものは、黙して飲むべきだということです。その理由は「神のみぞ知る…」でした。

マリヤは、その胎に御子を宿すことを「あなたのおことばどおり、この身になりますように」とお受けした時、その心が刃で貫かれることをもお引き受けしたのでした。

十字架上で、「わが神、わが神、どうして…」と叫ばれた主も、その杯に盛られた苦みのすべてを黙って飲み干されたのです。どんな理不尽と思えることの中にも、神の深いみ心が隠されていることがあります。この地上で起ること、私たちの経験するすべてに理解と納得がいくわけではありません。しかし、すべてのことに神のみ心と神の真実、神のたいなる慈愛とあわれみがあることを信じ、信頼してお従いしていきたいものです。

結論

試練の中で神の前にひれ伏し、その主権を認めて主を告白することができますように。隠された神のみ心と慈愛とあわれみを信じ、すべてを受け止め、神を賛美することができるよう、ご聖霊の助けを祈り求めましょう。

研究資料

(金井由嗣)

ヨブ記概観

「ヨブ記」はヘブライ語正典において「諸書」に分類されており、形式・文体の上からも文学作品として扱われることが適切である。物語の発端となった事件は実際に起こった出来事であり、その出来事についての伝承が語り継がれていく中で豊かな思想と文学的表現を獲得していったとみなすのが妥当である。そのすべての過程に聖霊の豊かな働きかけを認めることが本書（及び同様の文学書）における「靈感」の信仰である。

信仰者の苦難の問題を扱った本書を理解するためにはテキストの正確な読解とあわせて解釈者自身の人生経験の深みが必要であり、それゆえに様々な人の本書への取り組みに学ぶ姿勢を持つことが大事である。

テキスト

1 ウツの地 哀歌4・21でエドムと関連づけられていることから、パレスティナより南東の土地と考えられる。口語では「ウヅ」。発音表記の違いは気にしなくて良い。ヨブという人がいた 原文は「ある人がいた。ウツの地

に。彼の名はヨブ」。彼はイスラエル人ではなかったが、真の神を信じる信仰者であり、主に従う「義人」だった。その点ではメルキゼデク（創世記14章）と同様である。誠実で（ハ）ターム。新共では「無垢な」、共同では「完全」直ぐな心を持ち（ハ）ヤーシャル、原義は「真っ直ぐ」神を恐れて（ハ）ヤラー） 悪から遠ざかっていた（ハ）サール） 敬虔を表す用語が四つ重ねられることで、ヨブの信仰が内面的にも実践においても模範的であったことを示している。

2 七人の息子と三人の娘： 旧約聖書において、子どもと財産はしばしば祝福のしるしと考えられた。東の人々の中で一番の有力者 東の人々（直訳は「東の子ら」という言い方によって、彼がイスラエル民族に属していないことが示されている。有力者とは財産だけでなく、神に従う信仰と人格においても重んじられる人であった。5 聖別した：全焼のささげ物を献げた ヨブが、心の中で犯した罪にすらも気を配る「誠実な」信仰者であったことを示す。家長であるヨブ自身が祭司の役割を果たしていることは、族长時代との類似を示している。

6 神の子ら 天使などの神に造られた霊的存在を指

す。**サタン** 原義は「敵対する者」。ここでは冠詞を伴った普通名詞である。本書ではサタンも神の主権に服することが明確にされている。悪の起源を単純にサタンに帰することができないからこそ、「義人がなぜ苦しむのか」という疑問が真剣な問題となるのである。

7 地を歩き巡り：「神の子」の一人でありながら、神の全知に挑戦しようとするサタンの不遜さ。「神のようになろうとする」傲慢こそがサタンの本質である。

9 ヨブは理由もなく神を恐れているのでしょいか ヨブの信仰が、物質的・経済的な祝福に由来する「御利益信仰」ではないか、とのサタンの問いかけである。

12 ただし、彼自身には手を伸ばしてはならない 神の主権の範囲内で災厄が許され、被害の範囲が厳密に定められている。なお、神がサタンの提案を受け入れたのは、ヨブを試みようとするサタンとは対照的に神がヨブを信頼していたからである（グティエレス）。

16～18 若い者たち：こ子息やお嬢さんたち サタンが奪うことを許される「財産」に奴隷や子供たちの人命が含まれることは、現代人の感覚にはなじみにくい。しかし大切な人の命が奪われたということが真の喪失であ

り、そこで初めて神の義と愛が問われるのである。親しい者を失うことが実際に起こる人生の現実の中で本書のメッセージを受け取るべきである。

20 立ち上がって上着を引き裂き、頭を剃り、地にひれ伏して礼拝し 悲報に接したヨブの行動と態度。上着を引き裂き、頭を剃ったのは悲嘆の表現であり、彼はけつして感情を押し殺して事態を受容したのではない。それでも彼の行動の中心は主への礼拝であり、悲嘆の中でも神を賛美し神に主権を帰すことは変わらなかった。

21 主は与え、主は取られる どれほど受け入れがたい事態であっても、ヨブはその中に神の主権を認め、神を賛美する。本書における彼の悩みと問いは、苦難においても神の主権を認めるからこそ生まれるのであり、その答えも神の主権的応答の中から与えられるのである。

参考図書 鍋谷堯爾（新聖書辞典）、ゴルディス『神と人間の書』、ジャンセン（現代聖書注解）、ヤナツイネン『主は取られる』、小畑進『ヨブ記講録』、向後昇太郎『主は与え主は取られる』、グティエレス『ヨブ記』、クシュナー『なぜ私だけが苦しむのか』、鎌野直人（『ペラカ』聖書日課17年10月18日～11月28日）。

牧羊ひろば



黒磯教会 教会学校

●はじめに

黒磯教会は栃木県那須塩原市にあり、二〇二三年に創立70年を迎えます。私たちの教会学校の働きについての報告、お証しをさせていただきます。

●二〇一五年以前

当教会では、一九六〇年から教会学校の働きが始まりました。六〇年代後半から教区の夏期バイブル・キャンプも当教会の旧会堂をキャンプ場として毎年、開かれていたときもありました。キャンプには当時の関東北教区の各教会からも多くの子どもたちが集い、キャンプで信仰の決心が与えられ、受洗する子どもたちも起こされていきました。

教会学校の働きはCS教師、教会員の様々な賜物が生かされながら様々な形で代々引き継がれ、二〇一〇年代

前半には、教会員のご自宅や地域の公民館をお借りして分校の働きも進められていきました。

二〇一五年から、協力教会の宇都宮共同教会の牧師夫妻や教会員の皆さんと共に、夏季合同キャンプも行われており、二〇一六年、筆者（辻林）が黒磯教会に赴任した後も継続されています。



協力教会合同サマーキャンプ

●毎週の教会学校の礼拝を継続

しかし、一〇年代半ばから少子化や様々な要因が重なり、教会学校に集う生徒の数は減少傾向にありました。部活等のために、日曜日の教会学校の礼拝に生徒が一人も来ないときもありました。しかし、月一回開いている教師会の中で「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしつかりやりなさい。」(Ⅱテモテ4・2)の聖句が示されました。話し合い、生徒が来なくても毎週の礼拝をささげましょう、と励まし合い祈り合って、続けてきました。



旧会堂での最後の礼拝後

●「那須、再び!」、黒磯での再会

新会堂(現会堂)建築計画が進み、会堂(旧会堂)を解体することになりました。旧会堂がキャンプ場として使われていた時代にバイブル・キャンプに参加され、救いの恵みにあずかった東北教区、関東教区の兄弟から、「会堂がなくなる前に、もう一度、見ておきたい」という声があがりました。

それに応えて、東北教区の先生方が、「もう一度、黒磯教会に集まり、主を賛美し、キャンプで受けた恵みを分かち合おう!」と「那須、再び!」と銘打って集会を計画し、兄弟に呼びかけてくださいました。

二〇一八年3月、東北、関東教区の教会の牧師、教会員29名が黒



那須、再び!

磯教会礼拝堂に集い、共に主を賛美し、かつてのキャンプの思い出や恵みを証しました。とても楽しく、喜びと感謝にあふれた集会となりました。

教会学校の働きの大切さ、バイブル・キャンプの恵みの素晴らしさを新たに覚え、分かち合うときとなりました。

●ジョイナス

子ども会を始める

二〇一八年度、新会

堂建築工事の開始に伴い、教会学校も仮会堂や貸しルームで、礼拝やお楽しみ会を行いました。それを機に教会学校の名称を「ジョイナス」に改めました。「ジョイ(喜び)」と「那須」、そして、英語の Join us! (仲間になる



新年の「もちたべたいかい」

う、一緒にしよう)を掛けた名前です。

そして、月一回、子どもたちが集いやすい午後「ジョイナス子ども会」として第一部が礼拝、その後に第二部としてお楽しみ会を行うことにしました。2月にチョコレート作り、春にサツマイモの苗植え、夏の花火大会、秋にイモ掘り等、季節に合わせた行事を毎月行いました。生徒や近隣の多くの子どもたちも喜んで集い、案内チラシをお友達に渡したり、誘ったりするようになりました。父兄も協力して下さいました。

●いっしょに集まることができなくても

二〇二〇年春、コロナ禍により4月12日イースターから5月31日ペンテコステの日まで、ジョイナスの礼拝は休会となりました。

主日礼拝をネット配信で行うようになったことをきっかけに、礼拝や集会に来ていた子どもたちが視聴してくれることを願って、紙芝居を教師が朗読してネット配信を始めました。

●ジョイナス再開

6月から主日の朝に会堂に集まり、ジョイナスの礼拝をささげました。久しぶりの再会を、CS教師、子どもたちと共に喜びました。

密を避け、換気を充分にして集会や行事も再開しました。毎年、夏休みに行っていた一泊二日のサマーキャン



別荘でのお楽しみ会

写真を撮るときだけ、マスクをはずして取りました。
写真撮影前後はマスクをつけています。

プ（夏季合同キャンプ）は中止し、代わりに日帰りの遠足に出かけました。そのときに教会員所有の山の中の別荘をお借りし、ゲーム大会も行いました。
秋のイモ掘りやジョイナス・クリスマス会も行うことができました。



秋のイモ掘り会

●新たなチャレンジ

部活等で、主日の午前9時からのジョイナス礼拝に出席できない子どもたちが何人かいました。それで教師会で話し合い、二〇二〇年12月から教会の集会や行事があるとき以外は、毎週午後一時から礼拝を始めることにしました。このことによって一人でも多くの子どもたちが



ジョイナス・クリスマス会

礼拝に集うことができるように、と願っています。

月一度の「ジョイナス子ども会」もいろいろ知恵を出し合って、取り組んでいきたいと思っています。

CS教師の兄弟がそれぞれ忙しい中、喜んで奉仕してくださっていることに感謝しております。

コロナ禍以降、毎主日のジョイナス礼拝の出席者は少なくなっていますが、一回ごとの礼拝、集会を大切に、生徒一人ひとりのためにとりなし、祈ってまいります。

「子どもたちを、わたしのところに来させなさい」(マルコ10・14)。主イエスは、今も子どもたちを招いておられます。これからも子どもたちの救霊のために労を惜しまず、奉仕させていただきたいとCS教師、教会員一同、祈り願っております。続いてお祈りください。

(辻林和己)

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚科向け)、B(主に小学生1~3年生向け)、C(主に小学生4~6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

おわりに

『牧羊者』二〇二一年度I巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労に感謝いたします。

巻頭言は堺栄光教会の後藤真師が執筆してくださいました。教師養成講座は二〇〇三年度I、II巻に掲載された長島幸雄師の原稿を一部編集して再掲させていただきました。「牧羊ひろば」では黒磯教会のCSを紹介していただきました。

なお『牧羊者』では今号より「新改訳2017」を使用いたします。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

メッセージ例

飯田勝彦師 櫻井めぐみ師 土屋開夫師

聖書講解

後藤真師 和田牧子師 大頭真一師

研究資料

小泉創師 石田高保師 福井文彦師 辻林和己師 小平徳行師

ワーク(A)

金井由嗣師 中島啓一師 鎌野幸師 宇野真佑美師

(B)

吉田美穂師 石川剛土師 山下大喜師

(C)

勝田幸恵師 三輪直子師 上森恭子師 勝田幸恵師

中高科へのヒント

竹崎光則師 田中裕明師 八幡直人師 三輪正見師 後藤健一師

子ども聖書日課

田中愛子師 小野淳子師 金田ゆり師

フラッシュカード

加藤満師 後藤栄子師 柴田福音師

み言葉カード・イラスト

丹羽遥姉 松浦あん姉 柴田福音師 加藤満師

ワーク打ち込み

多田豊子師 中島啓一師

校 正

後藤健一師

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇二一年度 I巻

二〇二一年四月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 企画監修 日本イエス・キリスト教団 信託局 教会教育室

印刷所 菱三印刷株式会社 電話 (078) 575-5511 FAX (078) 575-5611

* 聖書新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会 許諾番号 4-2-1750号